
IS ~ インフィニットストラトス ~ 黒騎士は織斑一夏

AST

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS〈インフィニットストラトス〉黒騎士は織斑一夏

【Nコード】

N7189X

【作者名】

A S T

【あらすじ】

変態腐れニート神との決戦で彗星に押し流されたマキナは、偶然にも円環から弾き出されてしまう
気が付けば、彼は織斑一夏として未知の世界に生まれていた。
この小説は一夏がマキナだったらカッコ良くな？という妄想から生まれた駄文ですので期待しないでください

第一話（前書き）

とうとう書いてしまった連載小説
どこまでいけるか分かりませんが
不安だらけのこの作品にお付き合いいただけるのでしたらお願いします。

第一話

ギロチンの刃に自分の首を飛ばされ敗北しながらも、やっと自分の名を思い出せた事

自分を創り出した腐れニート神との決戦で流星に押し流された自分の体が何処かへと墜ちてゆく浮遊感

ずっと墜ち続けた自分が新しく生まれ落ちた瞬間の光

「この子の名前は

」

第一話

織斑一夏は前世の記憶というものがある。

否、気づいたら新しく生まれ変わっていたという表現が正しいだろう
前世の彼であったのなら即座に死を望み、座に存在する変態ニート
神を呪っていただろう

だが、この身は前の様に死んだ身の姿では無く

織斑一夏という人間の肉体であり前世の姿では無い
かつてマキナと呼ばれ、本当の名をミハエルと呼ばれた彼の前世は
やっと死ぬ事が出来たと言う事だ。

ならば自分は織斑一夏としての人生を生きてゆこうと決意した。

まあ、ここまでは良かった。

軍事転用された宇宙用マルチフォーム・スーツ、インフィニット・
ストラトス、通称IS

篠ノ之束によって開発され、女性しか起動できないと言う欠点の為に女尊男卑の社会を生み出した。

現在はスポーツとしての形で落ち着いている。

そして国連によって造られたISの操縦者を育成する学園、IS学園

「何故、俺はここに居る・・・？」

そう呟き、周囲を見回す。

かつて小学生のころに分かれ、和風美人となった幼馴染に目をやる
と目を逸らされた。

本来、男である筈の一夏がここに居るのは、受験会場を間違え、偶然ISに触れたら起動してしまったからだ。

クラスメイトは全員女子、この状況を悪友の五反田弾に言ったら
それ何てギャルゲー？と心底羨ましそうな視線を浴びせながら言っ
たのを覚えている。

その時は「そうか・・・」と素っ気無く返したただだったが、
この気まずさと居心地の悪さの中で新しい人生の青春時代を過ごす
のかと考えると

今なら言える。

今すぐ代わってくれ！と

「———くん、織斑一夏くん」

「む・・・？」

気が付けばクラスの副担任である山田真耶が自分の名前を呼んでい
た。

「あ、あの、大声出しちゃって、ごめんなさい。あの、お、怒って
る？怒ってるかな？」

ゴメンね、ゴメンね！で、でも自己紹介、『あ』から始まって今『

お』なの・・・

だから、織斑君の番なんだよね、だからね、ご、ゴメンね？自己紹
介してくれるかな？」

ダメ？と涙目になっている山田先生を落ち着けてから自己紹介をす
る事にした。

「・・・落ち着け」

「は、はい！」

ぶっきらぼうな一言の筈なのに

何故か年上の男性に優しく言われた様に感じた山田真耶は頬を紅く染めながら答えた。

自己紹介をするべく一夏は席から立ち上がった。

「織斑一夏だ。・・・よろしく頼む」

彼の自己紹介終了

「えっと・・・以上ですか・・・？」

「これ以上、言葉で語る意味は無い」

キーン！！

多分、クラス中にそういう擬音が聞こえた気がする。

これが普通の男子なら単なる格好付けだと思われるだろう

しかし、一夏の多くを語らない寡黙な大人の男を感じさせる所

所謂ハードボイルドな男の雰囲気は漂っていた。

クラスの女子たちは自分達と同年代である筈なのに、

はるかに一回りも二回りも年上の大人であるかのように感じさせる

一夏にときめきを覚えた。(個人差はあるが)

「お前がそういう性格なのは分かっていたが、自己紹介としてそれはどうなんだ？」

その言葉と共に教室に入ってきたのは、

一夏にとって唯一無二に家族にして、幼い自分を学生の身でありながらも必死に自分を養ってくれた大恩ある実の姉

世界一のIS操縦者と名高い織斑千冬であった。

彼女の頬がやや赤く染まっているのはどうしてだろうか？

「すまないな、山田君。挨拶を押し付けてしまって・・・」

「いえ、これ位の事は・・・」

取り敢えず座る一夏

「全く・・・お前はもう少しマトモな自己紹介は出来ないのか？」

「・・・姉さん」

スパアン！と出席簿で頭を叩かれた。

「ここでは織斑先生と呼べ、いいな？」

「・・・分かりました。織斑先生」

その後、すぐにクラスのミーハーな女子達が騒ぎ出したりしたが、一夏は我関せずと言った様子で居たのだった。

第二話（前書き）

続きです。

素人の駄文を読んでもくださり、ありがとうございます。

第二話

授業が終わり少しの間の自由時間となった。

一夏はひたすらに腕を組んで目を閉じていた。

彼の周囲にいる女子達は話しかけたい様だが、良くある誰が話しかけるかで言い合っていた。

すると彼女達とは別の女子が一夏に話しかけた。

「ちよつといいか？」

閉じていた眼を開けて声の主の方を見る。

「・・・ああ」

短い返事を返し、席から立ち上がる。

「ここは人が多い、屋上で話そう」

教室の至る所から残念そうな声が聞こえたが、一夏は気にする事も無く彼女に連れられて行く

第二話

人気の無い一年校舎の屋上で一夏は久しぶりに再会した幼馴染と二人きりでした。

「久しぶりだな、篝。六年振りか」

「ああ、お前も相変わらず無口なままだな」

「・・・饒舌な方が良かったか？」

「いや、それはそれで何か気持ち悪い」

「・・・随分な言い様だな」

少しムツとした感情が声にも伝わる。

どうやら一夏の感情は顔で無く、声に出るらしい

「・・・まあ良い、教室で一目見てお前だと分かった。」

「そ、そうか？」

「髪型、眼、雰囲気・・・こんな所か」

箒は顔を照れくさそうに自分の髪の毛を弄っている。

一夏は彼女との記憶を思い返していた。

自分の拳は強すぎた。

だから彼女の実家である神社の道場で剣道を学び始めた。

そこで共に剣を学び高めあった幼馴染

姉妹揃って人付き合いが苦手で両親が悩んでいた事も思い出せる。

最初の頃はお互いに交わす言葉は少なく、素っ気ない会話ばかりだった。

まともな会話をする様になったのは彼女が男女と馬鹿にされ、イジメを受けていたのを助けた時からか

馬鹿にされている彼女を抱き寄せ、ただ相手に向かって一言

「黙れ」

それだけで彼女にイジメをする者はいなくなった。

子供なら気絶する寸前の殺気をぶつけたのだから当たり前である。

ちなみに一夏は気づいていないが、この時の箒の一夏を見る眼は王子様を見る眼だったらしい

それから一夏は箒を抱き寄せて胸の中でひとしきり泣かせた後に元気づける為に彼女の額にキスをした。

これは精神が子供の扱いに慣れていない独り身のオッサンである一夏が、胸で泣いている箒をどう元気づけようか必死に考えていると唐突に前世で唯一の子持ち（親父として色々ダメな美丈夫は除外）で子育て経験のある同僚ならどうするかと思いついた結果である。効果は抜群だった。むしろ抜群すぎた。

何故なら、その直後に同僚だった白騎士の如く神速の速さで走り出したのだから

その時の感想は

「・・・どうやら元気になった様だな。感謝するぞ、バビロン」

何処かで困った様に苦笑しながら“やっぱり兄弟かしらね？”と自分が育てた曾孫に言うFカップの巨乳美女が居たとか何とか・・・そろそろチャイムが鳴る頃だろうと思った一夏は過去の思い出から帰還して箒に言った。

「話したい事はまだ有るだろうが、そろそろ鐘が鳴る頃だ、戻るぞ。」

「

「そう・・・だな」

少し残念そうな表情になる箒を見て一夏はやれやれと言った様子で溜息を吐くと

「・・・箒」

彼女に急接近し

「なッ、ななな何だ？」

箒の頬が赤く染まるのにも構わずに

「綺麗になつたな」

そう言つて昔の様に額にキスをした。

「~~~~~ツ!!!!!!」

「??????」

箒は顔がものすごい勢いで真っ赤に染まり、ぶしゅゅゅと蒸気を出し

まるで蒸気機関車の如く、猛スピードで教室にすっ飛んで行った。

「・・・熱でもあつたのか？」

当の本人だけが何も分かっていなかった。

“やっぱ、罪造りな男だよね。あのマキナがあんな事するなんて思わなかつたけど、流石は藤井君のお兄さんって思えるよね？”

と、また何処かで、好意を抱く自分の後輩を弄るクォーターの少女が居たとか何とか・・・

その後、授業に無事、間に合った二人であったが、篝の方は顔を真っ赤にしながらもどこかニヤけており

千冬は、またコイツかと言いたげな表情で一夏を見ていたのだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

当の本人はやっぱり気づいて無かった。

第二話（後書き）

なんかマキナがキャラ崩壊を起こしている気がしなくも無い
リザさんと玲愛先輩は完全な傍観者の場所にいます。

直接、話に関わることはありません。
多分ね

第三話（前書き）

今回、マキナー夏を喋らせ過ぎた。

キャラが崩壊している様な気もつとしてきたぞ？

・・・やっべえ、お気に入り登録している人が意外と多いぞ
プレッシャーは無い（キリッ）と言いたいけど・・・

・・・うん、やっぱり無理

第三話

「~~~~であるからしてISの基本的な運用は~~~~」

一夏が箒と教室に戻ってきてから、現在二限目の授業を受けている。相変わらず一夏は無表情で教科書を見ていた。

箒の方はぶしゅくと顔を真っ赤にしながらも何とか授業を受けている。

流石にその様子を不審に思ったのか

「えつと・・篠ノ之さん？」

「は、はいッ!？」

「随分と熱っぽそうに見えますけど大丈夫ですか？」

「も、ももも、勿論です!大丈夫です!」

物凄い動揺しながらも答える箒

その様子にクラスメイト達の乙女センサーは教室に戻ってきた様子やそれからのニヤケ顔と蒸気噴射から、休み時間に絶対何かあった!

と確信するのだった。

「ちょっとよろしくて?」

「・・・む?」

二限目の休み時間、今度は金髪縦ロールのお嬢様が一夏に話しかけた。

「なんですの! そのお返事。私に話しかけられるのも光栄なのですから

それ、相応の態度と言う物があるのでは無いかしら?」

それを聞いた一夏は即座に脳内情報を検索、該当する人物を探し当てる。

「英国の代表候補生か・・・」

「その通りですわ。名前まで覚えていらっしやらないのは、如何なのかしら?」

「覚えていない訳では無い。セシリア・オルコット」

ジロリとセシリアを見ると、ぶつきらぼうに言う

「何の用だ?」

「まあ! 何て物言いでしょう!? 本来、私の様な選ばれた人間とクラスを同じくするだけでも奇跡なのですわよ? その辺りをお分かり頂けるかしら?」

「そうか・・・幸運だ。」

「馬鹿にしているのですか!?」

喰ってかかるセシリアと我興味無しと言った様子の一夏

まるで構って欲しい犬が吠えてくるのを適当に相手する飼い主にも見えなくない

「ふ、ふん! まあ、よろしいですわ。何か分からない事が有ったら泣いて頼まれるのでしたら、教えて差し上げてもよろしくてよ!

何せ、私は入試で唯一教官を倒したエリートなのですから!」

ある程度落ち着いたセシリアが偉そうに言うが

「俺も倒した。」

「・・・・・・は?」

セシリアだけで無く、会話を遠巻きに見ていたクラスメイト達まで

呆けた声を上げた。

「わ、私だけと聞きましたか!？」

「女子では、な」

「で、では、私だけでなく貴方も倒したと言うのですか!」

「ああ」

「どうやって!？」

ガアツと再び食って掛かるセシリア

教官を倒したと言う事に興味深そうに眼をキラキラ輝かせているクラスメイト達

彼女らに説明するように一夏は語る。

「突撃したら、向こうの方も突撃してきた。」

「それで?」

「懐に入った。」

「そして近接武器を使って倒したと?」

「頭掴んで地面に叩きつけた。」

「……………ひどっ!!!」「……………」

実際、相手になった真耶は凄まじい速度で地面に叩きつけられた衝撃で気絶

そのまま追撃してもう一方の拳を叩き込もうとしたら

ブザーが鳴って試験が終了した。

まさか高空から地面に顔面を叩きつけられるなんて経験したのは彼女が初めてだろう

意識を取り戻した真耶はその時の記憶が飛んでいたらしい

おそらく精神の安定を図るために脳が記憶から消去したのだろう

その後、千冬に“お前は教官を潰す気か!”と怒鳴られた。すると、チャイムが鳴りだした。

「ッ!…っ、続きはまた後ですわ!」

セシリアは捨て台詞を吐くと自分の席に戻ってゆく

三限目の授業を終え、今は四限目の授業だ。

「これから再来週行われるクラス対抗戦に出るクラス代表を決める。クラス代表者とは、そのままの意味だ。対抗戦だけで無く、生徒会の会議や委員会にも出席する。まあ、クラス長の様なものだ。クラス対抗戦とは入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点では大した差は無いが競争は向上心を生む。一度決まれば余程のことが無い限りは一年間変更は無い。その点を踏まえておけ」

教壇に立った千冬が全員に言い放つ

いつも通りの一夏は興味が無いとばかりに腕を組んで千冬を見ている。

「はいっ！織斑君を推薦します！」

「私もそれがいいと思います！！」

クラスメイトが次々と一夏を推薦する。

「では、候補者は織斑一夏・他にはいないか？自他推薦は問わないぞ？」

それに反論する声が上がった。

「待って下さい！納得がいきませんわ！！」

机を叩きながらセシリアが立ち上がる。

「そのような選出は認められません！！大体、クラスの代表が男だなんて言い恥さらしですわ！！私に、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえと言うのですか！？」

更にセシリアは捲し立てる。

「実力で言えば、私がクラス代表になるのは必然！それを珍しいからと言う理由で極東の猿にされては困ります！！大体、文化も後進的な国で暮らすこと自体私にとっては苦痛でしか——「下らん」何ですって？」

一夏の言葉の端々には怒りの感情が感じられた。

「下らんと言った。クラス代表になるのであれば、国家の代表候補生ならば

他国を国を侮辱する言動は慎め、英国には礼儀と言う物が無いのか

？」

普段寡黙な一夏がここまで喋るのは結構怒っていると云う事だ。

「なっ、私の祖国を侮辱しますの!？」

「先に侮辱したのは貴様だ。英国人^{ライミー}」

イギリス人への侮辱の言葉を言われたセシリアは

「決闘ですわ!！」

「良いだろう」

前世で黒騎士と呼ばれた男に挑戦状を叩き付けた。

「もし私が勝つたら小間使い!いいえ、奴隷にして差し上げますわ

!！」

「俺が勝つた場合はどうするつもりだ？」

「そんな事、万が一にもあり得ませんわ!

もし貴方が勝つたら奴隷でも何でもなつて差し上げますわ!！」

まあ、そんな事あり得ませんが!と云うセシリアに一夏は問う

「手加減はどうする?」

「あら、早速お願いかしら?」

「違う、俺の手加減だ。」

するとクラス的女子が一斉に笑い出す。

「織斑君、それ本気で言ってるの?」

「男が女より強かったのつて大分昔の話だよ?」

口々に言うクラスメイトが言うが、下らなさそうに一夏は語る。

「それは女がISを使えるからだ。女が男に対しての絶対的優位性を持つISを

男の俺が使える。それがどういう意味か分かるか?」

その言葉にクラス中が押し黙る。

「それにIS以外の肉体的要素は男の方が上だ。学力は本人次第で如何にでもなる。」

つまり、と一夏は続ける。

「ISが使える事以外で男女に差は無い」

俗物共の政策で女尊男卑の社会が作られただけだ。

と見事に政治家を敵に回す発言を一夏はした。

「話が逸れたな・・・尤も、俺と貴様に経験による差があるのは否めん。」

だが、決闘に手加減を加えるのも誇りに反するか・・・」

一夏はそう言ってセシリアを見据える。

「良いでしょう！私の誇りに掛けて貴方を全力で倒して差し上げますわ」

その言葉に一夏は僅かにニヤリと笑った。

それに気づいたのは筈と千冬の二人だけであったが・・・

「さて、話は纏まったな。勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う」

織斑とオルコットはそれぞれ用意しておくように」

千冬がそう言って纏めると、授業が始まったのだった。

第三話（後書き）

さっさと原作買って読まない和不味いな・・
金使いたくないから中古で買おうと思うけどあるかな？
大学生なのにバイトが出来ないのはキツイ
感想をくれるともっと嬉しいです。

第四話（前書き）

感想をくれた皆様、お気に入り登録をしてくれた皆様
本当にありがとうございます。

皆様方の応援や感想を見ると、本当にこの作品を投稿して良かった
と思えます。

これからも、よろしくお願いします。

さて、今回の話は、ネタ有り、エロ有り、笑い有り、青春有り、と
様々な劇が繰り広げられます。

ゆえに面白くなると思うよ

では読者の方々、彼ら彼女らの織りなす劇をご覧ください（ニート風）

第四話

押し倒した彼女の糸纏わぬ裸体が一夏の眼に映る。

上気した彼女の頬

シャープな輪郭の顔

凜とした意志を感じさせる眼

ベッドの上に広がる濡れた黒髪

豊かな胸

ほっそりと引き締まった体のライン

くびれのある腰

しなやかに引き締まった脚

それらが集まり一つの芸術品であるかの様な美しさを醸し出している。

そして目の前の彼女は初夜を迎える生娘の様に

「一夏……」

その瞬間を待つように目を閉じる。

第四話

話は放課後に戻る。

本日の授業も終わり、授業の復習の為に教室に残っていた所へ真耶がやって来た。

「ああ、織斑君。まだ教室にいたんですね。良かったです。」

「何か？」

「えっと、織斑君が生活する寮の部屋が決まりました。」

「……自宅通い」

少なくとも一週間は自宅通いと言う事を一夏は聞かされていた。すると真耶はこっそりと耳打ちしてきた。

「そんなんですけど、事情が事情なんで一時的な処置として部屋割りを無理やり変更したみたいなんです。・・・その辺りの事は政府から聞いてます?」

一夏は首を横に振った。しかし一夏は事情を理解した。

本来なら女性にしか動かさないはずのISを動かした唯一の男性操縦者

その価値は計り知れないものだ。

入学式になる日まで自宅の前にはマスコミがたくさん集まって来ていたし

解剖させてくれ、体を調べさせてくれ、等と言ってきたマッドまで居た。

仕方なしに取材を受けた時の受け答え

「世界初の男性IS操縦者になった気持ちは?」

「どうでも良い」

「やはりあのブリュンヒルデの弟と言った所ですね」

「下らん、俺は姉の付属物では無い」

「何か一言を!」

「特にない」

「研究させてくれ！」

「貴様が永遠に呼吸しないで生きていたらな」

と最後に変なのが混じっていたが、いつもの調子で受け答えしていた。

「と言う訳でして、政府の特命もあつて織斑君を寮に入れる事を優先したらしいです。」

「一月もあれば個室を用意できるので、それまでは相部屋で我慢してください」

ふむ・・と一夏は顎に手をやってから気づいた。

「荷物は？」

「それなら私が手配した。ありがたく思え」

「姉・・織斑先生が？」

荷物などは一週間後から運ばれてくる様になっていたが

どうやら千冬が手を回してくれたらしい

「相変わらず、何も無い部屋だったかな・・」

その言葉に真耶が驚いたように千冬に尋ねる。

「えっ、織斑君って私物が少ないんですか？」

「ああ、昔からこいつは必要最低限の物しか持たん。」

「じゃあ、趣味とかは・・・」

「強いてあげるとしたら、料理や家事か？」

「それって一般の男子から離れているんじゃない・・・」

「家事が出来ない姉を持つところな、ぶっ!!!?」

最後まで言い切る前に千冬のチョップが一夏の脳天に直撃していた。

「人の個人情報を漏らすな」

「・・・弟の個人情報は良いのか？」

「お前は私のモノだ。拒否権は無い」

誤解を生みそうな発言である。

現に真耶は顔を真っ赤に染めて、イヤンイヤンと体をくねらせている。

「・・・不条理だ。」

「弟は姉に逆らってはいけないと決まっている。」

常識だろうか？と千冬は言い放った。

姉が白と言えば何色であるつとも白、黒と言えば何色でも黒

それが織斑家の不文律であり、絶対の法則

姉と言う座から流れ出た法則である。

『流出：絶対に君臨せし姉』である。

「とにかく四の五の言っても何も変わらん。生活必需品だけで充分だろう?」

「俺のレシピは・・・?」

その言葉に衝撃を受けたかのように固まる千冬

「くっ、不覚!この私がまさか一夏のレシピを忘れるとは・・・」

そのレシピには今まで一夏が培ってきた料理だけで無く、

マッサージ等の技術やテクニックまで書き記してある。

正に一夏の技術が詰まった秘蔵の書である。

別名、シスコン白書

全てが千冬の為に習得した技能であるのだが・・・

彼女に養われていた一夏はせめて自分が出る全ての事をしよう

彼女の為に出来る事を死にもの狂いで習得していったのだ。

その話は置いておいて

一夏は真耶から渡されたメモ用紙に書いてある番号の部屋1025室へと向かっていた。

部屋に入ると、そこら辺のホテルとは比べ物にならない程の設備だった。

取り敢えず自分の荷物に入ったダンボールを確認した直後

「ああ、同室の者が。こんな格好ですまないな。私は篠ノ之ほう・・・き・・・」

シャワー室からバスタオル一枚の姿で出てきた筈の姿が・・・

「「「「「「「「」」」」」」」」

バスタオルを体に巻いているのではなく、体に押さえつけている状態の為

結構、きわどい所まで見えていた。

まず目に付くのは、バスタオルで隠しきれない程の豊かな胸の膨らみ

幼少の時に見た幼女の裸では無く

成熟した体つきとアジア系の未熟な顔つきという

アンバランスであるが故の魅力があった。

随分と女らしくなった成長したものだな・

と、約2秒でここまでの評価をした一夏を凄いと言っべきか

箒は、そんな一夏を見ながら肩を震わせている。

「・・・寒いのか？」

「ぎゃあああああああッ！！！！」

悲鳴を上げると同時に、箒は部屋に置いてあった竹刀を取り

一夏に向けて振り下ろす。

躲す素振りさえ見せなかった一夏は、そのまま脳天に一撃を受けて倒れるかに思えた。

が、ここに居る一夏はただの一夏では無い

バシィ！と右手で竹刀を掴んで受け止めると、

勢い良く自分の方へ竹刀を引き寄せる。

同時に竹刀を握っていた箒もそのまま引き寄せられ一夏の胸にダイブする。

その勢いそのまま箒を抱き寄せ半回転して、彼女をベッドに押し倒す。

両腕を押さえつけ抵抗できないようにする。

「落ち着け」

そう言っただけ彼女の姿を改めて見る。

バサツと幾分か水分を吸って重くなったバスタオルが落ちた音が響く

そして冒頭に戻る。

「一夏・・・」

何かを待つ様に目を瞑る箒を見て

流石の一夏も何をすればいいか分かっていた。

「箒・・・」

チュツという音が彼のキスした所から聞こえた。

彼女の頬から……

「ふえっ？」

箒は自分が予想していた場所とは違う所にキスをされて

驚いた様にも、残念そうな様にも聞こえる声を上げたのだった。

「落ち着いたか？」

一夏は彼女の顔を覗き込みながら聞いた。

「あ、あう……」

プス・・プス・・プシューと先刻と同じ様に顔が真っ赤に染まり蒸気を噴き上げる箒

一夏は顔が近いから話しづらいのだろうと思い、顔を離れた。

成熟した箒の体を改めて見ると大人顔負けのプロポーションである事が分かる。

箒の全裸、二つの母性の頂点とか下腹部の成長具合と言った

本来隠されているべき場所までしっかりと見ていた。

まあ最近では色々と解禁されているから、直接的な描写が無ければ問題無いだろう。

と、一夏がメタな事を考えた瞬間、部屋のドアが開かれ

「なんか凄い悲鳴が聞こえたけど、大丈夫!？」

「何、どうしたの!？」

「何があったの!？」

箒の悲鳴を聞きつけた女子生徒達が突入してきた。

「……………あ……………」

その場にいた全員の声が重なる。

今の一夏と箒の状況を見て、第三者はどう思うか？

制服姿で全裸の女子を押し倒し、抵抗できない様に腕を抑えている
男子

状況証拠的に言い逃れは出来ない状況である。

このままでは一夏が性犯罪者となってしまう!!

と、約0.2秒で判断した箒は無我夢中で口を動かしていた。

「ち、違っんだ!これは……私と一夏の訓練だ!！」

その発言がどれほどの誤解を生み出すのかも知らずに……

一夏と篝の親密さは休み時間の様子から、

即座に学園中とはいかないが同学年の生徒たちの間では広まっていた。

そして明らかに性犯罪としか見えない状況で言い訳しているのが男では無く、女の方

それらを加えて彼女たちが下した判断とは

「「「「「「し、失礼しました！！どうぞごゆっくり~~~~」」」」」」

「だから、誤解だアアアアアアツ！！！」

無慈悲にもドアがバタンと閉められた。

“これで明日には、一夏と自分はこういう仲だと学園中に広まってしまうのだな・・・”

そこまで考えた篝は「おや？」と考える。

“あれ？むしろ、これで私と一夏は公認の仲になったのでは？”

と、乙女的思考回路が神速の如き速度で答えを導き出した。

“し、しかし、なし崩し的に一夏とそっいう仲になるのは如何か？”

と、今度は篝の良心が咎める。

女神で天然で巨乳の金髪碧眼フランス娘に終了させられたのだっ
た。

決して、

育てられた環境のせいで世渡りが上手く

高い人気を誇る尽くしてくれる系の男装美少女では無い

部屋の外に出た一夏は箒が着替えるのを待っていた。

少し時間が経ってからドアの向こうから箒の声が聞こえた。

「入れ・・・」

ドアを開けて、部屋に入ると剣道着を来た箒が立っていた。

その顔はかなり真っ赤に染まっており、体が震えている事から
相当な羞恥心に身を焼かれているのだろう

まあ、意中の男に風呂あがりの姿どころか

フルヌードを見られてしまったのだから、無理も無いだろう。

こうして顔を合わせるだけでも、必死で耐えている事が分かる。

対して、一夏は表情を変える事も無く

「すまなかつたな、箒」

深々と頭を下げるのだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・沈黙が二人の間を支配する。

未だに頭を下げたままの一夏、何を話せばいいのか迷っている箒

二人の間で時間だけが過ぎ去ってゆく

「とりあえず、頭を上げる・・・」

箒がそう言うと一夏は頭を上げ箒を見る。

彼女は顔を紅く染めたままだった。

「さっきの事は水に流そう、それの方がお互いの為だ・・・」

「そうだな・・・」

このままでは何時まで経っても、お互いにギクシャクしたままだ。

ならば水に流してしまった方が良く、と箒は考えたのだった。

かなり惜しい事をしたとは思うが、

これからの生活で一夏との仲がギクシャクして話し辛くなるよりはマシだ。

それに同室で一緒に過ごすならば、まだまだチャンスはある。

“モッピー知ってるよ、一夏はこんな18禁ハプニングでは揺らない男だったこと。”

箒の脳内に座す軍師モッピーは己の知識を総動員して

状況を判断し、箒にとっての最善の決断を導き出したのだ。

（感謝するぞ、モッピー！）

形容し難い笑みを浮かべるデフォルメキャラに礼を言う箒

“箒にとって最善の未来を導くのがモッピーの役目だって知ってるよ”

そんな声を残してモッピーは己の内に帰って行くのだった・

二人はとりあえずベッドに腰掛ける。

「お前が私の同居人なんだな・・・」

「嫌か？」

何て事も無いように聞いてくる一夏に箒は

「別に嫌と言う訳では無いんだ・・・しかし“男女七歳にして同衾せず”と言っただろう?」

軍師モツピーの助言で幾分か素直になっただらしい

「ああ・・・俺もそう思う」

だが、と一夏は続ける。

「国からの要請だ。仕方無い」

やはり一夏は大人だった。

「それに幼馴染であるお前と一緒にの方が落ち着く」

「そ、そうか、私と一緒にの方が落ち着くのか・・・嬉しいものだな」

そう呟いた筈の笑みはとても優しげで、綺麗だった。

「何故だ?」

「昔から一夏には助けられてばかりだった・・・だからお前に頼られるのは嬉しい」

「そうか・・・」

何時しか二人の間には春の陽だまりの様に優しい空気が流れていた。

と、ここまでならいい話で終わったのだろうか……

ふと、視線を感じた一夏がドアの方を見ると

じ~~~~~と、ドアの隙間から見ている乙女達が居た。

自分の部屋に戻っていたかと思いきや、最初から見ていたらしい

ニヤニヤと二人の甘酸っぱい青春劇をゆっくり鑑賞していたらしい

主に同じ乙女である筈の方ばかりだが……

この劇の主役は一夏では無く彼女の方だったらしい

「……鍵をかけ忘れたな」

「きゆう」

流石に羞恥心の限界を突破したらしい筈は

珍しく可愛らしい声を上げて意識を手放したのだった。

「篠ノ之さんも乙女よねえ……」

「うんうん」

三年生の先輩の一人の言葉にみんなが同意した。

“ やれやれ、だな…… ”

一夏は仕方ないとばかりに箒をベッドに寝かせると彼女の頭を慈しむ様に撫でる。

“ 少しは成長したと思ったが、まだ未熟な子供だな…… ”

まるで彼女の兄か父親の様な事を思いながら、彼は来客者の相手をするのだった。

どうやら神は意外と恐怖劇以外の演出もするらしい

第四話（後書き）

はい、どうでしたか？

今回は前回の三倍以上の文字量です！

気づいたらこうなっていたんだ。

一回これ、自動的にやり直しになったから

はっちゃけた文は無しにします。

勝手にユーザートップに戻った時の脱力状態で今、必死に書いてます。

さて次回は、決闘までの日々を短い話で書くか、抜かして決闘を書くか、悩んでいます。

後、詠唱にゲーデやアーサー・ハーバートの詩をそのまま使おうと考えてますが

著作権とか、大丈夫ですよ？一応、コピーしたサイトには違反していたら削除しておきますって書いてあったから・

ただ、セシリアとの対決はある意味、期待を裏切るかもしれませんがと言って置きましょう、だって、大学の講義中に思いついたんだものセシリアとの決闘は当初予定を変更します。とだけ言って置きます。まあ、変わるかもしれないですけどね。

第五話（前書き）

はい、今回は戦闘です。
初戦から創造とかが出ます。

それではどうぞー！

第五話

セシリアとの決闘の当日、放課後の第三アリーナAピットには一夏と箒が二人きりでいた。

観客席にはクラスメイト達が、管制室には千冬と真耶が居た。

セシリアは先にISを展開して、一夏を待ちかまえている。

一夏は箒と共に自分の専用機が届くのを待っていた。

第五話

「来ないな……」

「ああ……」

するとスピーカーから真耶の声が聞こえてきた。

『織斑君、来ました！織斑君の専用IS』

『織斑、すぐに準備をしる。アリーナの使用時間にも限られているからな、初期化と最適化は実戦でやれ、お前にとって、この位は問題ないだろう？』

ハッチが開き、視界に入ってきたのは“白”だった・

「これが一夏の専用機・・・」

『織斑君の専用IS“白式”です。』

純白の機体に触れ、精神を集中する。

“ニグレド黒騎士の俺が、アルペド白騎士を使う事になるとは・・・これも何かの縁か”

そう思って、彼は“白式”を装着し一体化する。

“しつくり来るな・・・”

やはり前世での経験がISとの同化に役立った様だ。違和感が無い

『織斑、気分はどうだ？行けるか？』

「大丈夫だ。行けるさ」

その言葉に千冬は“そうか”とだけ返した。

「一夏・・・」

筈が不安げにこちらを見るが、一夏はカタパルトの方を向く

「行ってくる・・・」

「ああ・・・勝つて来い」

フツ、と笑うとカタパルトから発進する。

「織斑一夏・・・出る。」

黒き騎士は新たな力を得て、再び戦場に羽ばたいた。

嘗て黒騎士と呼ばれし男は、新たな世界で白き装甲を纏い、ここに蘇った。

アリーナ上空まで上昇し、待ち構えていたセシリアを見る。

「あら、やっと来ましたのね。待ちくたびれて仕舞いましたわ」

「それはすまない、ISの搬入が遅れた。」

だが、と一夏は続ける。

「この戦いは退屈させん」

「あら、たいそうな自信ですわね。」

互いに相手を見据えて、集中する。

『これより、クラス代表決定戦、織斑一夏 対 セシリア・オルコットの対戦の始めます。』

真耶の号令と共にセシリアが先手を取った。

彼女の持つスターライトMk ？から放たれたレーザーが一夏へと向かう

「・・・遅いな」

それを身を振り、紙一重で躲す一夏

「さあ、踊りなさい！！この私とブルー・ティアーズの奏でる円舞^{ワル}曲を！！」

続けてレーザーが襲い掛かってくるが、全てを紙一重で躲し続ける。

「遅い、遅すぎるな・・・」

彼にとってレーザーの速度は、光速であるのにも拘らず慣れてしまっている。

前世に於いて約五十年間もの間、マキナは魔城で二人の騎士と訓練をしてきた。

その片割れである白騎士の称号を持つ少年：ウォルフガング・シュライバー

彼の能力は絶対先制加速、これによる速度の上限は無い

故に彼は光速の相手であっても、その上に行く神速の速さとなる。

そんな超加速能力を相手にしていれば、嫌でも速さに慣れる。

まあ相性上、彼は一度も攻撃を当てる事は出来なかった訳だが・・・

馬鹿げた速度に慣れてしまっているが故に、高速対応が可能な反射神経なのである。

体は一夏であるが、最近になって音速までなら完全に対応できるようになった。

流石にレーザーの光速には対応できないが・

“ まだまだ、射撃も未熟だな ”

中身が歴戦の戦士である一夏は、彼女の射撃をそう評した。

「 棒立ちでは、相手の射撃兵器の的だぞ? 」

悠々绰绰と一夏は彼女の欠点を述べながら、高速移動で彼女の横へと回り込む

そして近接用ブレードで切りかかる。

「 くっ!!!? 」

間一髪の所で回避したセシリアは一夏から一旦距離を離す。

まさか、接近を許してしまうとは思ってもいなかったセシリアは本気で一夏を倒そうとする。

「 貴方が初めてですわ。ここまで私の攻撃を避けたのは。 」

その貴方に敬意を表して全力で行かせて頂きますわ! 」

ブルーティアーズの肩の装甲から、四機のビットが射出される。

「む……」

それぞれが別々の方向から一夏に向かってレーザーを放ち始めた。

それすらも躲してゆくが、

その内の一撃は躲しきれ無いと判断したの一夏は右手のブレードで叩き切った。

「なッ!？」

まさかレーザーを叩き斬るなんて非常識な真似をするとは思っていなかったセシリアが驚きの表情で一夏を見た。

「まだ、戦いは始まったばかりだ……全てを見せてみるがいい」

まるで、彼女を試しているかのように言い放つ一夏

その眼は、まだこの程度ではないだろうか?と語っている。

「いいでしょう、この私、セシリア・オルコットの全てを貴方に見せてあげますわ!」

セシリアは己の全てを一夏へ見せつける為に戦う

“未熟だ……ならば、この戦いを教訓に出来るものへと変えて

やるっ”

一夏は先生的な事を思いながら、彼女の円舞曲ワルツに付き合っただった・
・

モニターでそれを見ていた篤は一夏の行動に疑問を持っていた。

「何故、追撃しなかったんだ・・・？」

一夏がセシリアを切り付けた直後に、追撃していればダメージを与えられた筈だったのだ。

「多分、オルコットのワルツに付き合っつもりなんだろう・・・」

千冬が篤の質問に答える。

「どうしてですか？早く決めてしまえば良いと思わないんですか？」

真耶が不思議そうに聞いてくる。

「あいつは戦士だ。戦いの中でオルコットを教育するつもりなんだろう・・・」

「教育って・・・オルコットさんは代表候補生ですよ？」

「だが、実戦の経験も無く、戦場を知らない」

“私もだがな”と付け足して真耶の疑問に答える千冬

「では、織斑君には戦場の経験があるんですか!？」

「いや、無い筈だ・・・だが、あいつは明らかに戦場を、闘争を知っている。」

そう言った千冬表情はどこか悲しげであった。

試合開始から十分後・・・

セシリアは自分の胸の内の変化に戸惑っていた。

彼の戦士として眼に男を感じ、胸が熱くなるのはどうしてか？

自分を見守るような父親の様な眼に安らぎを感じるのはどうしてか？

“自分の胸の内を焼く、この感情は何だ？

数瞬の後、彼女はその答えに思い至る。

“ああ、そうですね・・・この感情が恋と云うものなのですね・・・”

己が内に芽生えた感情は、自覚した途端に更に激しさを増しながら

燃え上がる。

彼に自分の全てを見て欲しい・・・そして、その全てを受け止めて欲しい、と

この時、セシリア・オルコットのの中に生まれた想いは確かに渴望だった。

そこに水銀の手が加われば、永劫破壊の術式はここに完成する。

“さて、彼女が語るのは道を求める物か？道を覇する物か？”

彼女の口から語られるのは、己が渴望の具現化

一夏の眼が僅かに驚愕で見開かれる。

Love bade me welcome : yet my soul drew back ,

愛は私を喜んで招き入れてくださった、だが私の魂はしり込みしていた

Guilty of dust and sin .
塵と罪に汚れていたからだ

But quick - eyed Love , observing me grow slack

だが慧い眼をお持ちの愛は、私がぐずぐずしているのを見ておられた

From my first entrance in ,

私が初めて戸口に入った時から

Drew nearer to me, sweetly
questioning,

私に近付いて、やさしくおたずねになったのだ

If I lack'd anything.

客人が、私は答えた、ここにふさわしくないのです

A guest, I answer'd, worthy to
be here:

何か足りないものがあるのか?と

Love said, You shall be he.

愛はおっしゃった、お前がその客人になるがいいと

I the unkind, ungrateful? Ah, my
dear,

私のような薄情で恩知らずな者ですか?ああ、わが愛しきお方よ

I cannot look on thee.

私はあなたを見つめることもできません

Love took my hand, and smiling
did reply,

愛は私の手を取り、微笑んでお答えになった

Who made thee eyes but I?

私でない誰がその目を作ったというのだ?

Truth, Lord, but I have married
hem: let my shame

真実です、主よ、ですが私はそれを汚してしまいました、私の恥に

Go where it doth deserve .

しかるべき報いを受けさせてください

And know you not, says Love, who
bore the blame?

お前は知らないようだな、と愛はおっしゃった、誰がその責めを
負ったのかを？

My dear, then I will serve .

わが愛しきお方よ、それではお仕えしましょう

You must sit down, says Love, an
d taste my meat :

お座りなさい、愛はおっしゃった、そして我が肉を食べるのです

So I did sit and eat .

そこで私は座り、いただいたのだ

Cru

創造

Seren go laud ydd tei mlad syrth
io mewn cariad

星光降り注ぐ、恋慕心情

彼女を中心に異界が展開される。

しかし、世界が灼熱の世界に変わる事も無ければ、紅い月が照らす夜になる事も無い

だが、彼女の世界が生み出された事だけは確かであった。

「織斑さん……いえ、一夏さん……私の全てを受け止めて下さいな」

熱っぽい声で愛しい彼に告げた彼女は、同時に蒼き雫達を一斉に放った。

一夏はそれを油断せずに回避しようする。が・・

「言った筈ですわ、全て受け止めてと……躲そうとするなんて酷いではありませんか」

彼女がそう言った直後、蒼き雫達から放たれたレーザーが拡散した。

まるで雨の雫の様に丸く小さな光の弾が、豪雨の如く彼に降り注ぐ！！

「——ッ！！！」

最大出力で急速上昇し、雫の弾幕から脱出するが

全てを躲しきれず、装甲が豪雨に降られシールドエネルギーを持って行かれる。

「くっ!」

一撃一撃の威力は大した事無いが、それが豪雨の如く降り注いでくるのだ。

完全に躲す事など、あの千冬ですら難しいだろう

だが弾幕を何とかやり過ごした一夏はそのまま彼女へ向かって行くが……

「……だから言った筈ですわ。全て受け止めて欲しいと!」

次の瞬間、背中に豪雨が降り注いだ。

「ぐっッ!?!?!」

突然の衝撃に落下してしまう一夏だが、すぐに体制を立て直す。

“そういう事か……”

一夏は理解した。

彼女の渴望は“自分の全てを受け止めて貰いたい”と言う霸道である。

つまり、当たるまで追い続ける大量の弾幕

レーザーが拡散して小さな雫の様になったのは、全て受け止めて欲しいものと言う事から

四つでは足りずに表現しきれないと言っ事だ。

その眼は久しぶりの窮地に焦りと楽しみを感じている事で輝いていた。

“ つくづく、自分は戦う事に向いているらしいな…… ”

自分は戦いの運命に戦わずに生きてゆく事は出来ないらしい

次の瞬間、一夏を包み込むようにして、レーザーの弾幕が襲い掛かった。

その頃、管制室でも騒然としていた。

「レーザーが拡散した!？」

真耶が驚愕の声を上げる。千冬も驚いたような表情をしている。

更に一夏が飛び越して躲す。

するとレーザーの弾幕はとんでもない速度で曲がり、彼の背後から直撃する。

「一夏ッ!！」

篤が思わず声を上げた。

「馬鹿な・・・いくら偏向射撃が理論上可能とはいえ、あの曲がり方
はあり得ん・・・」

「で、では、あれは一体・・・!?」

篝の言葉に千冬も考える。

すると、クラスメイトの声が千冬の耳に入ってくる。

「セシリアさん、凄いね。」

「でも、あの詩って何だろう?」

そこで彼女は思い至る。

「まさか・・・あの詩を詠う事で発動する単一使用能力なのか・・・?」

「そんな!まだ二次移行でも無いのに単一使用能力の発現なんてあ
り得るんですか!?!」

真耶の言葉に、さあな、と千冬は返して続ける。

「ISはまだ謎が多い、あれが何であっても真実は分からない」

そして彼女はモニターに映る弟の姿を見る。

“ どうかやら、目はまだ死んでいない様だな・・・ ”

その表情は凜々しく、見る女、全てを引き寄せる魅力があった。

“自分ですら魅力を感じるのだから” と思い

ちらりと、他の連中に目を向けると・・

箒は頬を紅くして王子様を見る眼をしているし、隣にいる副担任も同じ様な目をしている。

“相変わらず罪作りな奴だ”

千冬はフラグ野郎の弟を見て溜息をつくのだった。

このままでは負けるだろうが、時間的にそろそろだろう

すると、彼を包み込むようにレーザーが全方位から襲い掛かった。

「一夏ッ！！！！」

箒が再び彼の名前を叫ぶ。

逃げる事も防ぐことも不可能な必中の攻撃に包まれた彼は墜ちるのか？

“それでは面白く無いだろう？”

英雄ヒーローとはどんな強敵にも決して負けず、最後に勝利を掴む。

それこそが英雄譚なのだから

織斑千冬はフツと笑って言った。

「機体に救われたな。馬鹿者め」

モニターには白では無く黒に染まりし、騎士の姿があった。

「一次移行！？・・・まさか、今まで初期設定で戦っていたのですか！？」

セシリアが驚いた様子で彼に聞いてくる。

どうあっても、自分は黒騎士である事是否定できない様だ。

そして、その手に展開された武器は姉が使っていた物と同じだ。

「俺は最高の姉を持った。

幼き俺を必死で養い、栄光よりも俺を選んでくれた最愛の姉だ。

あの時に、俺は彼女を支える事を誓った！！

だからこそ、お前を倒す！

見せてやる。この俺を！！！！」

黒き装甲を纏った彼は彼女を本気で倒すことにした。

「……………」

千冬は体を震わせながら涙を流していた。

「……千冬さん。どうぞ」

「……すまない」

箒からハンカチを受け取ると溢れてくる涙を拭く

「いい弟さんを持ちましたね」

「ああ、いつも泣き言ひとつ言わずに、グスツ……私を支えてくれた

……グスツ……弟だ……」

だが、彼女は更に涙を流すことになる。

一夏は詠う、嘗ての渴望とは違う渴望の二つ

E s i s t u n s e r e l i e b e , I c h l i e b e
d i c h , I c h w i l l d i c h u n t e r s t ? t
z e n

―我が愛しき者よ、私は貴方を愛し、貴方を支えたい

D u u n t e r s t ? t z t e s t m i c h l a n g e .

― 貴方は、私を長い間支えてくれた。

D u g a b s t m i r a l l e s , u m m i c h z u
u n t e r s t ? t z e n .

― 貴方は私を支える為に、全てを私に捧げてくれた。

I c h u n t e r s t ? t z e d i c h d i e s e s M a
l .

― 今度は私が貴方を支える番だ。

G i b d i e s e n K ? r p e r , a l l e s ,

― この身を全てを捧げて

W i d m e n w i r s i c h d i r .

― 貴方に尽くそう

― B r i a h

― 創造

I c h g e b e e i g e n e n W e g D i e W e l
t d e s B r u d e r s

― 我捧ぐ・姉弟世界

それは最愛の人の為に出来る事を全て行いたいと言う渴望から生まれし求道

その力は万能化、ありとあらゆる物全てを使いこなす事が出来る能力

「は、はははははは！！素晴らしい！素晴らしいですわ！！一夏さん！！」

初期設定で私を苦戦させただけで無く、

一次移行で単一ワンオフアビリティ使用能力を発現させるとは！

やはり、貴方は最高に素敵ですわ！！さあ、もっとこの円舞曲ワルツを楽しみましょう！！」

セシリアの表情は歓喜に満ちていた。

自分の惚れた男は、これ程までに強さを示し、屈する事無き誇り高さを見せている。

“ならば全力を以ってして、全てを受け止めて下さい！一夏さん！！”

また一夏も熱烈な視線に眼で答える。

“お前の全てを受け止めてやる”

蒼き雫達がセシリアの周囲に集う

セシリア自身もレーザーライフルを構える。

円舞曲の終曲を飾るに相応しい一撃

“さあ、受け止めて下さい！！これが私の全てです！！一夏さん！！”

放たれし全てのレーザーは拡散し、再び収束して一つの極光を生み出す。

それを受け止めるべく一夏も又、正面から突撃して躲す事などしなかった。

“単一使用能力：零落白夜、発動！！”

巨大な極光の奔流の中を一夏は剣で切り裂きながら突き進む

「……………ッおおおおオオオオオッ！！！！！！！！！！」

咆哮を上げながら、スラスターの全開出力で突き進む。

「セシリア・オルコットオ！！」

極光の先に待ち受ける彼女の姿を、その瞳に捉える。

そして極光を突き抜け、所どころが融解した剣を捨て、彼女へ一撃を放つ！！

「これが！織斑一夏だアアアッ！！！！！！！！」

彼の放った拳と、彼女が最後に放ったミサイル

そのどちらが早く到達したのかは、言う必要はないだろう・・・

「何が“これが！織斑一夏だ！！”だ。負けたじゃないか！！」

保健室で箒に看病してもらいながらベッドの上に寝ている一夏

「そうだな・・・」

最後の一撃を放った時、確かに一夏の拳は届いた。

だが最後に放ったセシリアのミサイルの爆風が一夏の拳の狙いを僅かに逸らし

本当にギリギリの差で負けたのだ。

0・1：0の差で・・・

やはりレーザー四発分の直撃を受けたのがいけなかったらしい

「悔しいな……」

「そうか……」

ああ、そうだ。と一夏は言う

「必死で力を求めた癖に、敗北した……それだけなら許せる。

だが、姉さんの同じ力を使っておきながら敗北した。

俺は姉さんにまた恥をかかせた……」

相当、悔しいのだろう。握られた拳の色が変色して白くなっている。

するとそこへ……

「何を言っているか馬鹿者」

「姉さん……」

千冬がやって来た。

「いつも、お前は自分を責める馬鹿者だ。」

「う……」

千冬に責められて、しょんぼりする一夏

だがな……と千冬は言う

「お前が必死で私の為に努力してきたことは知っている。」

「……………」

「だから少しは自分を許してやれ……」

そう言っつて千冬は一夏を抱きしめた。

「……………ありがとう」

「構わないさ、充分すぎる位お前は尽くしてくれた。その礼だと思え」

そのまま一夏は安心したのか、千冬の胸の中で眠ってしまった。

「千冬さん……」

「織斑先生だ……後は頼んだぞ？」

「はい……………」

一夏を箒に託した千冬は保健室から去って行ったのだった。

「一夏……………」

箒は安心したような表情で眠る一夏を撫でながら、思う。

“お前は何時まで経っても千冬さんの事しかないのだな……”

何時か、そこに自分も入って見せると誓った彼女は、

自分も強くならなければと思うのであった。

何処かにある研究室の一室に彼女はいた。

「あはははは！これは凄いね！まさか、これ程の事が出来るなんて！」

ISの開発者、篠ノ之束はディスプレイに映る光景に興奮していた。

「己の渴望を世界へ戦闘用に具現化して、現出させるなんてさ・・・」

非科学的にもほどがあるよね、と束はこちる。

「このセシリアって娘の渴望は、レーザーを拡散と収束まで自在にしているし、」

おまけに追尾性能まで付いちゃってるなんてチートもいいところだよ・・・」

すると、束の背後から影法師の様な男が現れた。

“如何かな？彼女等が演じた歌劇の程は・・・”

「私の予想以上だよ、胡散臭くて最初は信じられなかったけどね・

「・

“ふむ、君がそう評するならば、私が手を加えただけの甲斐があったと言っただよ”

ニヤリと影は語る。

「でも、この創造って言うのは、誰でも使えるんだよね？」

“然り、君が使いたいと言うのなら、君に与える事も出来るが？”

「ふうん・・・じゃあ、今度頼もつかない・・・」

“では、自分の内に眠る渴望を理解する事だ。それまでは私も舞台裏にいるとしよう”

そう言い残すと影は消えて行った。

「そうだね・・・貴方が出てくるのは舞台の最終章・・・」

そしてその時こそ貴方の願いを叶える時」

“ そうだよね、メルクリウス？”

・ 束の、その言葉はどこか暗い闇の中へと消えてゆくのだった・・・

第五話（後書き）

セシリアの創造に使った詩はジョージ・ハーバートの詩

「愛は私を喜んで招き入れてくださった」です。

前回のあとがきで、名前間違えました。

一夏の創造はオリジナルの詩で翻訳サイトを使用しました。
能力はゼロの使い魔のガンダルーヴと同じです。

武器以外にも適応されるといのが違いですが・・・

そして、最後にまさかの二ト登場

ISコアに永劫破壊の術式を仕組んだのもコイツです。

束がISを開発した時期に登場して関わっています。

これからどうなってゆくのか？

それはこれからのお楽しみです。

ではこの辺で・・・

第六話（前書き）

はい、ASTです。ちょっとカプセルガンダムにハマッていました。
遅れてすみません

中国娘の出番は次回にしました。
では、第六話です。どうぞ

第六話

「と、いう訳で一年一組のクラス代表は織斑一夏君に決まりました。・・・あ、”一”繋がりでいいですね」

試合の翌日、朝のホームルームで真耶がそう言った途端

教室中から歓声が沸き起こった。

第六話

「・・・何故だ？」

不思議そうに一夏が真耶に聞く

自分の記憶が正しければ決闘に勝った方が代表になるという事だった筈である。

「それはですね「それは私が辞退したからですわ!!」・・・うう」

答えようとしたら、その上から勢い良くセシリアが答えたので、涙目になる真耶

「勝負は確かに貴方の負けでしたが、私とほぼ引き分けの僅差に

持ち込んだのですから・・・」

セシリアは咳払いを一つしてから続ける。

「それで、私も大人気無かったと反省しましたので・・・」

彼女は一夏にっこり笑いかけると

「一夏さんにクラス代表を譲ることにしましたわ。

IS初心者であれ程の実力ですのでクラス代表になって実験経験を
積み重ねていけば、

国家代表も夢ではないと思いますの」

そこでセシリアは頬を少し赤く染めながら一夏を見て言う

「そ、それですわね・・・私のような優秀かつエレガント、華麗に
してパーフェクトな人間が操縦を教えれば、それはもうみるみる内
に成長を遂げて――」

「生憎だが一夏との訓練相手は私だ。」

そこで箒が立ち上がり、セシリアを睨んで牽制する。

どうやら乙女の勳が、彼女を明確なライバルだと認識したらしい

しかし彼女も怯む事無く、箒を余裕の目で見る。

「あら、誰かと思えばISランクCの篠ノ之さんでは無いですか。

ランクAの私に何か御用かしら？」

「ら、ランクは関係ない！ 一夏の相手は私だ。一夏にどうしても頼まれたからな・・・」

実際は一夏がどうしようか・・・と考えていると彼女と一緒に訓練してやろうと半ば強引に誘った結果である。

一夏自身も訓練用ISが無いから、筭の誘いに付き合ったのだ。

それは良いとして、二人の頭からバシン！バシン！と打撃音が響き渡った。

出席簿を片手に現れた千冬が、頭を抑えて悶絶する二人に言う

「座れ、馬鹿共」

そして、彼女は言う

「お前たちのランクなどゴミだ。私からしてみれば団栗の背比べだ。まだ殻も破れていない段階で優劣など付けようとするな。」

千冬
コイツみたいな規格外ランクの奴でもだ。と、一夏を指して言う

ちなみに一夏のランクは規格外のSSである。

これは千冬のSランクを超えて、計測不能レベルの適正值に暫定的につけたランクである。

つまり一夏は世界一の適正值を持っているのである。

「代表候補生でも一から勉強してもらうと前に言っただろう。」

下らん揉め事は十代の思春期の特権だが、生憎今は私の管轄時間だ。自重しろ。」

厳しく表情を引き締めて言う千冬に一夏は

「流石だな・・・これで私生活もしっかりしていれば良いのだが・・・」

そんな事を考えていると、千冬がこちらを向いた。

「織斑、今何か無礼なことを考えただろうか？」

ギロリと睨んでくるが、一夏は平然としていた。

「・・・完璧な存在など、この世界に在りはしないと考えただけです。」

相変わらず、ぎこちない敬語だった。

「そうか・・・」

ズバン！！

「すみませんでした。」

「分かれば良い」

千冬はフン、と鼻を鳴らしてから宣言するよつに言う

「クラス代表は織斑一夏。依存は無いな？」

ここに一夏がクラス代表であるが決まったのだった・・・

その後、ISを装着する為に一組の生徒全員がISスーツを着てグ
ラウンドに居た。

ISスーツは簡単に言えばスクール水着に似ている為、健康的な太
腿とか見事に露出しており、男である一夏の視線を気にして恥ずか
しがつている者も居たが・・・

当の一夏本人は腕を組んで立っているだけで、女の肌に興味は無い
とばかりに無関心だった。

その様子に残念そうにしている一部のクラスメイトが居たのだっ
た。

「それでは、ISの飛行訓練を開始する。織斑、オルコット、I
Sを展開しろ」

一夏は待機状態にある己のISに目をやる。それは黒きガントレ
ットであり

その外見は『人世界・終焉変生』だった。

“本当に、これも何かの縁か……”

「何を呆けている？ 早く展開しろ」

ふと気づくとセシリアは既に展開している。

千冬に急かされた一夏は腰に腕を置いて肘を横に突き出す。それは押忍！の格好に近い

「—— Yetzirah」

次の瞬間には黒い装甲を纏った一夏がそこに居た。

「よし、飛べ」

その言葉と共に砲弾の如き速度で上空に飛び上がる一夏、それに続いてセシリアも優雅に飛んでいる。

ある程度の高さまで上昇すると一夏は宙返りして待機する。

「流石ですわ、一夏さん。」

何処か嬉しそうにセシリアが話しかけてくる。

「いや、それ程でもない……」

素っ気無く返したのだが、その会話を快く思わない者がいた。

「では、今度二人きりで一緒に訓練を」一夏、何時までそんなとこ

ろにいる！早く降りて来い！！」

いきなり通信回線から怒鳴り声が聞こえたので、地上に目をやると
箒が真耶からインカムを奪っていた。

「織斑、オルコット、急降下と完全停止をやって見せる。目標は地
表から十センチだ。」

千冬が箒に拳骨を振り下ろして言う

「了解しました。では一夏さん、お先に。」

そう言ってセシリアは一気に加速して急降下し、一気に減速して完
全停止をしてクリアした。

“ 流石は代表候補生と言った所か ”

そう思いつつ、一夏も急降下を開始する。

急速度で地上へと降下して行く、そして地表ギリギリで轟音と共に
止まる。

「・・・確かにクリアはしたが、その方法は止める」

千冬が言ったのは、地表寸前で一夏は一気に拳を突き出し拳圧で速
度を相殺したのだ。

普通の人間が出来る事ではない。一夏だから出来るのだ。

「まあ、良い・・・次は武装展開だ。」

千冬が一夏の前に立つ

「では、やってみる」

一夏は何も言わず、ただ無言で拳を前に突き出し雪片式型を展開する。

「これ位は問題無いか・次はオルコットだ。」

「はい」

セシリアは真横に左腕を肩の高さまで上げる。

「ふむ、流石は代表候補生と言った所か・ただしオルコット、そのポーズは止める

誰を撃つつもりなんだ？」

「で、ですが、これは私のイメージにまとめるのに必要な――」

「直せ、いいな」

「はい・・・」

流石のセシリアも千冬には逆らえず、ただ返事をするしかない様だった。

「次だ。オルコット、近接武装を出せ」

「は、はい」

「……………ああ」

一夏はパーティーの中心で、クラスメイト達から次々と祝いの言葉を送られていた。

いつもの如く、ぶっきらぼうな返答に無表情といった様子だが、彼女達の気持ちを無下には出来ないらしく、ちゃんと会話に付き合っている。

その様子を見て、箒は不機嫌そうに茶を飲んでいる。

「はいはい、新聞部です。話題の新生、織斑一夏君に特別インタビューを申し来ました〜!!」

オオ〜と盛り上がる一同、学生だけあってノリが良い様だ。

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長をやってます。ハイ、これ名刺」

「……………どうも」

「ではでは、ずばり織斑君、クラス代表になった感想をどうぞ!!」

「……………特に無い」

「え〜、もっと良いコメント頂戴よろ?案ずるな、私は負けん!!とか」

お前はどごぞの黄金的な台詞を求めんのかよ!?!と突っ込みたいが気にしないで置こう

「夏はマキナだ。マキナがそんな事を言うなんて無理にも程がある。」

「……言葉で飾る必要など無い」

「おお……ハードボイルド……」

「夏は言葉では無く、行動と背中では語る漢なのだ。」

「じゃあ、仕方無いから適当に捏造しておくから良いとして……セシリアちゃんも何かコメントを」

「私、こういったコメントはあまり得意ではないのですが……」

そう言いながらも、満更じゃなさそうにしているセシリア

「では、まずどうして夏さんに代表を譲ったのかと言うと――」

「あ、長そうだから、写真だけで良いわ。」

「ちよっ!?!?」

「クラス代表を譲った理由も、織斑君に惚れたからでいいよね?」

「なっ!?!? ななな……」

セシリアが真っ赤になってプシュと蒸気を吹き上げる。

「ああ、織斑君、セシリアちゃんとのツーショットが欲しいから並んで?」

“まさか、筈までもが一緒になって入ってくるとは……”

獣殿もびっくりのチームワークである。

「あ、貴方達ねえ!!」

「セシリアだけ駆け抜けはけないでしょ?」

「ま〜ま〜」

「クラス全員の思い出になっていいじゃん」

「わ〜い、おりむ〜に、いのっちと写真〜」

「先輩、後でその写真くださいね!!」

“全く、子供だな……”

一夏はそんな事を思いながら彼女達の見ていたのだった。

その後、セシリアの肩を抱いたことに対する筈の嫉妬に、頬へキスすることで落ち着いた。

が、ズルイと言うセシリアを含めたクラスの声に

一夏は仕方なくクラス全員の頬にキスする事になったのだった……

結局この馬鹿騒ぎは夜十時まで続けられ

その間に一夏は数え切れない位、クラスメイトの頬や額にキスをしたのだった・・・

流石に“唇にしてくれ”と言う者は、同じ乙女達によって阻止されたが・・・

それでも皆、その日はとても満足そうにしていたのだった・・・

第六話（後書き）

はい、一夏君の鈍感振りと父親的スキルの発動です。

すごいですね一夏、クラスメイト全員に唇ではないとは言え、何度もキスしてます。しかし、一夏自身は家族や友達に対するスキンシップの様なものと考えているので、性質が悪いです。

設定集（前書き）

これまでの設定集です。

設定集

ふむ、この舞台裏を見に来るとは、君も中々に奇特な・・・いや、知識欲が旺盛な人間なのかな？

・まあ良い、大したもてなしは出来ないが、ここを見に来たのだから、精々楽しんでくれたまえよ・・・フフフ・・・

・織斑 一夏

前世はDies iraeの聖槍十三騎士団・黒円卓第七位ゲッツ・フォン・ベルリツヒンゲン

通称マキナと呼ばれていた英雄ミハエル・ヴィットマン

腐れ二トことカール・クラフト：メルクリウスとの戦いで何の偶然か円環から弾き出されて、気が付けば織斑一夏として生まれていった。

性格は前世のまま、寡黙でぶっきらぼうに話す。

織斑一夏という存在の影響を受けており、困っている人を見捨てることはしない

言葉にせず行動で表す人間、背中で語るハードボイルド、しかしシスコン。

前世の影響か、人間離れた身体能力を誇る。

剣道も天童と称されるほどの腕前だが千冬には及ばない

素手での格闘においては比類なき強さを誇る

剣道も手加減しきれない格闘の代わりに学び始めたもの、素手でコンクリートを砕き、鉄骨を折り曲げる。

千冬を支える為に生まれた時から自分に出来ることを必死でやってきた。

第二回モンド・グロツソで誘拐され、千冬が決勝戦を棄権して助け

に来てくれた事は

彼にとつて最大の忌まわしい記憶である。

元々養つてくれていた事に感謝していた一夏は、この事件がきっかけで千冬への想いや感謝が増し、シスコン度が増した。

学校でもハードボイルドな雰囲気から友人は少なかったが、無自覚にフラグを立てる。途轍もなくモテる。

一部では同性愛者か、不能か、とまで言われる程、色恋に興味が無い実際には色恋に興味が無い訳では無いが、千冬優先の為に構っている暇は無いのが実情である。

千冬に対する感情は、殆ど感謝、恩義、罪悪感、といったものだと思っているが、恋愛感情も多少含まれている。

専用ISは白式

・白式

一夏のISだが、どうもニートが余計なお節介をしてくれたおかげで、外見が一次移行の際に黒く染まり、本来と単一使用能力が変わっている。

単一使用能力は零落白夜なのだが、一夏曰くこれは不完全な単一使用能力の発現らしい

一夏自身はこれを両腕部分のみを部分展開して使うことがある。

更に量子化の応用による禁断の技があるがリスクが伴う

創造は“Ich gebe eigen Weg Die Welt des Bruders 我捧ぐ・姉弟世界”

これは一夏の渴望の一つである“最愛の人の為に出来る事を全て行いたい”と言う渴望から生まれた創造である。

効果はあらゆる物を使いこなす事が出来る様になる。それが武器であるうと、楽器であるうと、器具であるうと達人級の技量で行える。

意外と実用性は高く、日常生活にはもってこいの能力、種類は求道型。

・篠ノ之 篇

設定は原作と変わりないが、幼い頃の一夏の行動から新密度や愛情は高い、姉の束がISを開発した事で家族が散り散りになり、一種の呪いの様な物だと感じている。

別れる際に掛けられた言葉で一夏に対しての想いは常に烈火の如く燃え続けていた。

素直になりにくい幼馴染系クールツンデレ

幼い頃に一夏から慰めのキスを貰い、それ以来事ある毎に頬や額にキスして貰ったり

綺麗になつたと褒められたりと、意外といいポジションにいる。

同年代のヒロインの中では好感度が一番高い

一夏に裸を見られたり、押し倒されたりと何かしらの18禁的ハプニングに見舞われる。

・セシリア・オルコット

設定は原作と変わらず、幼少期の体験から人を見下す事がある。プライドが高く、金髪縦ロールの髪型と、正にお嬢様キャラの一つを体現した存在

男である一夏を見下し、対立して決闘を行う事になり、戦いの最中に一夏の誇りや心の強さに惚れる。

イギリスのIS国家代表候補生であり、学年の中ではトップクラスの技量を誇る。

・ブルー・ティアーズ

セシリアの専用ISであり、第三世代型のISである。特殊遠隔実験兵装“ブルー・ティアーズ”を六基搭載しており、実験機としての割合が強い

タイプの後方支援機であり、射撃に特化している為、接近戦となるとショートブレードの“インターセプター”しか無いので苦戦す

る。

ISのコアにメルクリウスが簡易版エイヴィヒカイトを仕込んだために、創造が発動可能

創造は

“ Seren golau dydd teimlad syrt
hiomewncariad 星光降り注ぐ、恋慕心情”

これは彼女の渴望である“自分の全てを受け止めて貰いたい”という渴望をから生まれた創造である。

効果はレーザーを雨粒の様に拡散させたり、収束させて一つの巨大なレーザーにしたり出来る。更にレーザーは相手に当たるまで追尾し続ける。

欠点としてはレーザーの燃費が酷くなり、二十発程でエネルギーが切れてしまう点である。種類は霸道型

・織斑千冬

織斑一夏の実の姉であり、世界初のIS操縦者でもある。ISの開発者、篠ノ之束とは幼馴染の親友である。

ISの世界大会、第一回モンド・グロツソ優勝者であり『ブリュンヒルデ』の称号を持つが本人はその名で呼ばれる事を嫌っている。高校生の時に親が蒸発した為、幼い一夏を学生の身で育てた苦労人である。結構ブラコンが入っている。

性格はクールで凛々しく、即決即断と言う行動方針であり軍人に近いが、心優しい一面も見せる。

能力が総じて高く、あらゆる事に対しての才能に恵まれていた。しかし家事関連の事は全く駄目である。

IS学園の教師をしており、厳格な鬼教官であるが、私生活はだらし無い

・鳳 鈴音

設定は原作と同じ、日本に転校してきた時にイジメを受けていたのを第の時と同じ様に救われた。

慰めに頬へキスをされ一夏にプロポーズする程夢中だった。

これは一夏が彼女をよく撫でたりして、半分猫扱いしていたからである。

一夏曰く“猫の様な奴”先輩曰く“ネコミミが似合いそう”との事
生意気な悪友系ツンデレで素直になる事もあるが重い事だと素直になれない事も・・

中国代表候補生であり、二年でそこまで上り詰めた努力の才

・甲龍

中国第三世代型のISで鈴の専用機である。低燃費型の設計で近距離パワー型。最大の特徴は肩部にある非固定浮遊ユニットにある衝撃砲

ISコアに仕込まれたエイヴィヒカイトによって創造の使用が可能。
創造は“告別無永恆世界 告別無き永遠世界”

これは鈴の“別れたくない”と言う渴望から生まれた創造

効果は衝撃砲から不可視の糸を射出して、敵を捕縛したり引き寄せたりすることが可能。

しかし精神の強さによって糸の強度が左右される為、時には糸を引き千切られる。

種類は求道型

設定集（後書き）

キャラクターの設定や説明が出来次第、追加していきます。

外伝 もし一夏が獣殿だったら・・・（前書き）

はい、思いつきで書いてみました。

上手く獣殿ことハイドリヒ卿を書けているか不安です。

これは小説本編とは関係ありません。

あくまで、もしもの物語です。

外伝 もし一夏が獣殿だったら・・・

「織斑一夏だ。よろしく頼むぞ。麗しき乙女達よ」

IS学園に入学したのは、日本人でありながら黄金の瞳に鬘の様な長髪を持つ男だった。

その容姿は正に人体の黄金律と呼ぶにも、芸術品と呼ぶのにも相応しかった。

人間は本当に感動すると何も言えなくなるらしい・・・

外伝・もし一夏が獣殿だったら・・・

「久しぶりだな、篝。六年振りか・・・」

「ああ・・・貴方は相変わらずだな」

「ふっ・・・人はそう易々と変わりはせんよ」

「その口調も変わらないな・・・」

「ああ、だが卿は美しく成長した。そう、幼かった蕾が花開く様な」

「そ、そうか・・・」

「うむ、卿と語り合う事は多いだろうが、この時間で語り尽くせるものでは無かるう?」

黄金はかつて別れた第一の幼馴染と再会する。

「決闘ですわ!!!」

「良かるう、代表候補生たる卿の力を見せて貰おうか」

黄金は、英国の令嬢との決闘に挑む

「愛せよ『破壊の君』」
ハガルクオーツ

黄金は嘗ての神槍を鎧として身に纏う

「な、何故、私の攻撃が通用しないんですの!!!?」

「愛が足りんよ、セシリア・オルコット」

超然とした笑みを浮かべ、黄金は不動の構えをとる。

「では、卿を愛そう」—— Y e t z i r a h 「

彼の手に黄金の神槍が現れる。

蒼き雫を身に纏う令嬢は黄金の愛を知る事になる。

「久しぶりね、一夏!」

「そうだな、鈴よ。」

第二の幼馴染と再会する黄金

「その・・・私との約束を覚えてる?」

「ああ、卿との盟約は忘れもしない」

「じゃ、じゃあ・・・その・・・」

「甘いな、鈴よ・・・卿は私の愛は知っているが、私は卿の愛は知らん」

黄金に愛の深さを試される鈴

「よく、見ておきなさい一夏、これが私の愛よ!」

「ふむ、悪くは無いが・・・愛が足りんよ、鈴」

鈴の愛は黄金の心を射止めるには届かなかった。

「僕はどうする事も出来ないんだ・・・」

「卿はそれでいいのかね？」

黄金は貴公子の姫君に問う

「僕は貴方みたいに強くなんて無い・・・」

「ならば、頼れば良からう？」

「でも、僕の話聞いてくれる人なんて・・・」

「私は総てを愛していると言った。ならば卿も例外などでは無い」

「僕の言葉を・・・聞いてくれるの・・・？」

「その通りだ。さあ、卿の想いを吐き出すが良い」

「嫌だ・・・嫌だよ・・・諦めたくないよ・・・
まだ、やっていない事だつて、いっぱいあるよ。なのにこんな風に
終わるだなんて・・・」

「そんなの嫌だよ・・・助けて・・・助けてよ、一夏!」

「任せる・・・卿を救って見せよう」

そして姫君は黄金の手を取る。

「お久しぶりです。獣殿！」

「ああ、卿も健勝そうで何よりだ。」

黄金は、己に忠誠を誓う銀の髪に黄金の片目を持つ旧友と再会する。

「ほう・・・姉上を模す・・・か、卿が望んだ強さとは本当にこれか
ね？」

「
真に己の渴望を見つけられなかったか・・・ならば、私の愛で卿
の道を照らそう」

空虚な力に支配された彼女を黄金が破壊する。

「強さとは、一体何なのでしょう？」

「それは私や姉上が見つける事では無い、力は単なる力に過ぎんよ。何の為に卿は戦う？」

「分かりません・・・教官の様になりたいと思って、力を求めていました。」

「では、もう一度考えてみる事だ。何のために力を求め、戦うのか？・・・幸い、時間は沢山ある。」

力の意味を銀の少女は模索する。

「貴方を私の嫁にしてみせる！」

「はははははは！良かろう、卿の愛を私に見せてくれ」

銀の少女は黄金と共に在ろうとする。

臨海学校、照り輝く太陽の元、海で戯れる少女たちの瞳に、黄金の裸身が写る。

「うむ、海水浴など初めてだ。海は未知で溢れ返っている。」

「くっ、カールよ、ここで卿を感じるとは・・・」

力に慢心していた第一の幼馴染は、水銀の手が加わりし舞台上で暴君を演じてしまう

そして黄金は墜ちる。

「久しぶりだな、カールよ・・・」

「ええ、獣殿も変わり無き様で・・・」

「何故、卿はまた永劫破壊を？ここに円環は無いが・・・」

「獣殿、私の願いを聞き入れてくれはしませんか？」

そこで黄金は水銀の願いを知る。

「さて、私も挑ませて貰おうか・・・」

福音に挑むは新たな力を手にした黄金

「我が速度についてこれるか!？」

総てを追い越す速度で福音へと槍を振るう黄金

「ふむ、メイド喫茶か・・・面白い」

「フオオオオオオツ!!!?」「」「」

着なくても良いのに態々、執事服を着る黄金

「良くぞ、戻って来てくれたな。主よ」

執事なのに偉そうな黄金

「さて・・・卿等は私を怒らせた・・・」

「ハア？何言つてやがん——ガアツ!!!?」

黄金から放たれる殺意は余りにも圧倒的で凄まじい・・・彼等は黄金の逆鱗に触れてしまったのだ。

「私はM、そして織斑マドカだ・・・」

「卿は・・・」

戦奴として生きるしかない姉のクローンと黄金は出会う

そして、黄金と水銀は雌雄を決する。

「ふっ、カールよ、今こそ盟約を果たそうではないか・・・」

「そうだな・・・ハイドリヒ・・・いや、織斑一夏」

総軍を率いる黄金、そこに集うは戦奴としてでは無く、肩を並べ信頼する戦友として集った者達

「行くぞ、卿等の渴望を叩き返してやれ！・・・案ずるな私は負けん！！」

Dies irae, dies illa, solvet
aeclum in favilla. Teste David
cum Sybilla.

怒りの日 終末の時 天地万物は灰燼と化し、ダビデとシビ
ラの予言のごとくに碎け散る

Et arma et verba vulnerant
Et arma

武器も言葉も傷つける

Quantus tremor est futurus, Qu
ando judex est venturus, Cunct
a stricte discussurus.

たとえどれほど大きな戦慄が待ち構えていようとも 審判者

が来たり、厳しく糾され 一つ余さず燃え去り消える

Fortuna amicos conciliat inopi
amicos probat Exempla

—— 順境は友を与えるだろう 欠乏は友を試し絆を高める事だろう

Tube, mirum spargens sonum Per
sepulcrare regionum, Coget omne
s ante thronum.

—— 我が総軍に響き渡れ 妙なる調べ 開戦の号砲よ 皆すべからく 玉座の下に集つべし

Levis est fortuna id cito reposit
scit quod dedit

—— 運命とは軽薄である 与えたものをすぐに悉く裏切るが如く返すよう求める。

Lacrimosa dies illa, Quaresur
get ex favilla

—— 彼の日 涙と罪の裁きを 卿ら 灰より 蘇らん

Non solum fortuna ipsa est cae
casseditiam eos caecos facit
quos semper adjuvat

—— 運命はそれ自身が盲目であるだけでなく 常に助ける者 救われる者達をも盲目にする

Judicandus homo reus Huic ergo
parce, Deus.

—— されば天主よ その時彼らを許したまえ

Misc estultitiam consiliis bre
vem dulcē est desipere in loco
しい
僅かの愚かさも思慮に混ぜよ 時に理性を失え それが望ま

Pie Jesu Domine , dona eis requ
iem . Amen .
慈悲深き者よ 今永遠の死を与える エイメン

Ede bibē lude post mortem null
a voluptas
食べる 飲め 遊べ 死後に快樂はないのだから

「 Atziluth
流出

Du - sollst Dies irae
混沌より溢れよ怒りの日

Acta est fabula
未知の結末を見る

これはラインハルト・ハイドリヒが織斑一夏として生まれた人生を
描いた英雄譚である。

外伝 もし一夏が獣殿だったら・・・（後書き）

さて、次回を書くのは何時になるのやら・・・

まあ、気力がドバァツと湧いてきたら、一気に書きます。

特に感想を書いたり、評価をしてくると、気力ゲージが貯まりやすくなります。（ゲームかよ・・・）

うん、鈴の渴望は出来上がってますし、創造の効果も考えてあります。

原作と似たような効果です。

ただ、シャルの詠唱にピツタリな詩は見つかりましたし、渴望もあるんですが・・・

その渴望から、どのような戦闘能力に変換すればいいか考え込んでいます。

第七話（前書き）

はい、徹夜で書きました。

明日も大学なのにねえ・・・

でも、読者の期待に応え、感想を貰うべく、俺は書く！！

という事で今回、中国娘の登場です。

第七話

パーティーの翌日、一組の教室では噂が広まっていた。

その事について、隣の席の谷本癒子が一夏に聞く

「ねえ、織斑君は転校生の話、聞いた？」

「いや、知らん・・・」

第七話

「何でも、中国の代表候補生が二組に転入して来て、クラス代表になっただけなんだって」

「そうか」

「あら、私の存在を危ぶんでの転入かしら」

相変わらず自身満々にポーズを決めて言うセシリア

もしISが無い世界であったならば、彼女は女優になっていたのだろうか？

“中国か・・・まさか、な・・・”

「む、やはり気になるのか？」

「一応、戦う相手ともなれば、少しは気にもなる。」

「・・・むう」

不機嫌そうに複雑な表情になる筈

「来月にはクラス対抗戦だ。それまでに相手を知る事に損は無い」

「それよりも私と二人きりの訓練に付き合ってもらえませんか？
あれをうまく発動させられる様になりたいんです。」

確かにセシリアの言うとおりだった。

彼女はあれ以来、創造を上手く発動し切れていない

何故なら渴望を強靱な意志で維持しなければならぬからだ。

創造は、どれだけ強く渴望し続けていられるかと言う事が決め手となる。

簡易術式である為、創造を発動し維持するには強靱な意志で渴望を支える必要がある。

故に集中を切らしてしまうと即座に解除され、それまで麻痺していた疲労が一気に襲ってくるのだ。

嘗ては必殺技だった創造も、使い所を誤れば逆に敗北してしまうことも有り得る。

しかも彼女の創造は霸道型である為に効果空間内にいる者達の影響を受ける為、求道型よりも強靱な意志を持って自分の渴望を維持しなければならぬのだ。

創造について、千冬達に問い詰められたが一夏は束が仕込んだシステムだと説明した。

「今の所、展開時間が20秒前後、箒を加えると12秒が限界か……」

「はい……ですから、一夏さんのご教授を」

セシリアが一夏に聞くが

「生憎だが、お前は霸道型の創造だ。俺の求道型とは違う」

「霸道型？」

不思議そうに聞いてくるセシリアに説明をする。

「霸道型は周囲を変える物だ。多数を相手に向くが、渴望を強固に維持している必要がある。」

「求道型の方は何なんだ？」

箒も気になる様だった。

「求道型は自分を変化させる創造だ。一対一に向いている。渴望も自分のみに向けられるために霸道型よりは維持しやすい」

「では、求道型の方が良いのか？」

「いや、そういう訳でも無い・要は使い方だ。」

そう言って、簡潔に纏める一夏

「織斑君、頑張ってね！」

「フリーパスの為に！」

クラスメイト達も応援してくれるのは良いが、少しは欲望を隠したらどうか？と思う一夏

「今の所、専用機持ちは一組と四組だけだから余裕だよ。」

クラスメイトの鷹月静寂がそう言った直後に

「その情報、古いよ」

教室の入り口から聞こえてきた声に全員が眼をやると

先程思い出していた小柄なツインテールの少女が、そこに立っていた。

「二組のクラス代表も専用機持ちになったの、そう簡単には優勝出来ないから！」

「お前・・・鈴か？」

「一夏は何と云うご都合主義の展開か・・・と思いながらも、久しぶりの友に話しかける。」

「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たって訳」
「ビシィ！」と指を指してきた彼女を見て、一夏は・・・

「・・・似合わんぞ」

「んなっ！？何てこと言うのよ、アンタは！！！」

いきり立つ彼女の後頭部から、ゴスツと言う音がした。

「痛あく、何すんの・・・ふえ！？」

彼女が振りかえれば、千冬が立っていた。

「もうSHRの時間だぞ？」

「ち、千冬さん・・・」

流石の彼女も千冬の登場にたじろぐ

「織斑先生だ。早く行け、馬鹿者」

「す、すいません・・・また後で来るからね！逃げないでよね、一夏
！！！」

そう言っつて自分のクラスに戻つてゆく鈴

“まさか、代表候補生になつてゐるとは……”

二年前に別れた彼女からは想像も出来ない事だつた。

午前中の授業が終わつた後、昼食を食べる為に鈴と共に食堂に来ていた。

一夏は日替わり定食、鈴はラーメンを食べていた。

「しかし、驚いたぞ。お前が二組の転入生で代表候補生になつてゐるとはな」

「こつちだつてテレビ見て吃驚したわよ。なんでIS動かして、ここに居るのよ？」

「会場間違えて、触つたら起動した。」

「何それ……あいつ等は騒がなかつた？」

「ああ、騒いだ。」

思い出すのは自分を慕い、兄貴と呼んでくれた中学時代の舎弟達の事だ。

彼等は一夏の為なら何でもすると言つていた彼等は、マスコミの取

材を交代交代でシャットアウトしてくれていた。

劣ってやったら“兄貴にそう言っただけで貰えるなら何でもしますぜ”と言っただけ切っていた。

彼等の事は後に語るとして・・・

「一夏、そろそろ説明してほしいのだが？」

「そうですね、一夏さん。もしかして、此方の方と・・・っ、付き合っただけじゃないですか!？」

テーブルを叩いて、箒とセシリアが厳しい表情で問い詰めてくる。

「べ、べべべ別に私は・・・」

「違う、二人目の幼馴染だ。」

慌てふためく鈴の代わりに、至極冷静に一夏は言った。

「二人目・・・？」

「お前が小学4年まで、鈴が小学5年から中学2年までだ。」

箒に説明する一夏、その様子を見て鈴は溜息をついた。

「はぁ・・・アンタは相変わらずのハードボイルドね。」

「む？・・・彼女が箒、前に話した道場の娘だ。」

「ふうん、そうなんだ・・・」

鈴は箒を見定める様にジロジロと見る。負けじと箒も見返している。鈴の視線が彼女の一部に来た時、一瞬だけ頬が引き攣った気がしたが気にしないで置く

「初めまして。これから宜しくね。」

「ああ、此方こそ・・・」

お互いの背後に相對する龍虎が見えるのは気のせいだろうか？

「んんっ！私の事も忘れて貰っては困りますわ。」

私はイギリスの代表候補生、セシリア・オルコットですわ。」

「ごめん、アタシ・・・他の代表に興味ないから」

「なッ!？」

そう言つて一夏の方を向く、鈴

「ねえ、アタシがISの操縦見てあげようか？」

「一夏と訓練するのは私の役目だ!!!」

「そうですね！貴方は二組でしょう!?!敵の施しは受けませんわ」

「アタシは一夏と話をしてんの、部外者は引ッ込んでよ」

「むう………」

不敵に微笑む鈴と彼女を睨む箒とセシリア

「貴方こそ、後から出てきて何を仰ってますの!？」

「後からじゃ無いんだけどね。アタシの方が付き合い長いんだし」

「それを言うなら、私の方が早い!！」

お互いに牽制しあう乙女達、その様子を興味深そうに見ている生徒達

そして修羅場の真っ只中にいる一夏は……

「……ふう」

のんびりと茶を飲んでいた。

「『一夏』さん!！」

「……?」

怒ったように箒とセシリアが一夏に迫る。

が、当の一夏はそんな事構わずに鈴を見る。

「お前の父親は元気か？」

「うん、元気……だと、思う」

「……………そうか」

どこか暗い調子で返した鈴に何かあったと察する一夏

そこで昼休み終了のチャイムが鳴る。

「じゃ、じゃあね、一夏。また後で」

「ああ……………」

何か誤魔化すような様子で去って行く鈴

それを見て、一夏は

“一度、話を聞く必要があるか……………”

またお父さんの事を思うのだった。

放課後、第三アリーナでは一夏が箒とセシリア相手に訓練していた。

「ハアアアアツ!!」

やっとISの使用申請が通った箒は打鉄を纏って、一夏に切りかかっていた。

「ふん！」

ガギイン！と彼女の持つブレードを雪片弑型で受け止める。

「そこっ！！」

そこへセシリアがレーザーライフルを撃ちこんでくるが

「っ！！」

「ぐうっ！？」

箒を凄まじい脚力で蹴り飛ばし、一回転して剣でレーザーを切り裂く

「まだまだ甘いぞ・来い、セシリア」

「はい！」

一夏と距離を置き、攻撃を躲しながら詠唱をするセシリア。

箒もすぐに持ち直し一夏をセシリアに近づけまいとする。

—— Creu —— 創造

S e r e n g o l a u d y d d t e i m l a d s y r t h
i o m e w n c a r i a d —— 星光降り注ぐ、恋慕心情

異空間が展開され、雨粒の如き弾幕が一夏に襲い掛かるが

「おおおオオっ！！」

零落白夜を使用して弾幕を薙ぎ払い、彼女への道を切り開く一夏

そこへ箒が切りかかってくる。

「ハアアアッ！！」

「くっ・・・」

「まだですわよ！」

消し切れ無かったレーザーの雨粒が四方八方から襲い掛かる。

が、一夏の寸前でレーザーが霧散した。

すると一夏は一旦訓練を止めて、セシリアに近寄る。

「・・・25秒、記録更新だな。」

「はあ、はあ・・・そうですか・・・まだまだの様ですわね・・・」

「ああ、だが箒も加えた状態では大幅に長持ちしている。」

「そう言っただけで頂けると、幸いですわ・・・」

喋るのも億劫なのか、荒く息を吐きながらへたり込むセシリア

「今日はここまでだ。箒も良いな？」

「・・・私はまだ行けるぞ」

遊び足りないような子供の様な表情をする箒に一夏は言う

「創造を加えた訓練は相当消耗する。ある程度の余裕を持たんと明日に響く」

あの弾幕を躲すのに筈も一夏と同じ様に挑んでみたが、かなり複雑かつ高速の機動で回避しないとイケないので、見た目以上に体力を消耗するのである。

創造を展開するならば尚更だ。

「セシリア、立てるか？」

「ええ・・・何とか・・・」

一夏は彼女の手を取って立ち上がらせる。

すると、一夏は二人を抱え上げた。

「な、何をする!?!」

「い、一夏さん!?!」

二人が驚いた様に声を上げるが、一夏は気にも留めない

二人は一夏の腕を椅子代わりに、彼の首に腕を回している状況だ。

「余り無理をするな。筈も結構、疲れているだろう?」

「だからと言って、この体制は・・・」

篤が最後まで言わなかったのは、脳内軍師モツピーが何か助言したからだろう・・・

「一夏さん。その・・・重くないですか？」

ゼシリアの質問は、乙女にとって結構気になる質問である。

ここで原作の一夏なら、二人を比べたりして失礼な事を言ったりするだろうが

この一夏はそんな真似はしない

「大した事は無い・・・」

そう言ってマキナ一夏はアリーナから彼女等を抱えたまま出て行くのだった。

二人を反対側のピットに運んだ後、一夏は自分が出てきたピットに戻って来ていた。

そこへ鈴がタオルとペットボトルを持ってやって来た。

「お疲れ、一夏。飲み物はスポーツドリンクでいいよね？」

「ああ、待っていたのか？」

「えへへ、まあね・・・」

どこか嬉しそくに答える鈴からタオルを受け取り、汗を拭う一夏

「ね、ねえ、一夏。」

「何だ？」

「やっぱり、アタシがいないと寂しかった？」

「……そうだな」

「や、やっぱり、一夏はアタシが居ないとダメみたいね！」

何か凄く嬉しそうな顔をして言う鈴

だが、どこか空虚さや寂しさを感じさせる何かがあった。

「……鈴」

「何？いち——ッ！！？」

突然、一夏に抱き寄せられた鈴は一気に顔が真っ赤になる。

「iiiiiiiiii、一夏！？」

混乱する鈴に一夏は語りかける。

「何があつた？」

「ッ！？…な、何を」

彼女の体が強張り震えた声で一夏に返す。

一夏は鈴を優しく抱きしめると、耳元で囁く様に言った。

「無理をするな．．お前に何があったのかは知らん。だが、お前は一人じゃない」

「い、いちかあ．．．」

そのまま鈴は一夏の胸の中で泣き出す。

一夏は胸の中の彼女が泣き止むまで、優しく撫で続けていたのだ。た．．

「ごめんね、一夏。カツコ悪い所、見せちゃったね．．」

「気にするな。お前が笑顔になるなら構わん」

「一夏．．．」

ある程度、泣いて落ち着いた鈴は様々な事を一夏に話してくれた。

両親が些細な事で喧嘩して離婚し、母親の方へと引き取られた事

寂しさを紛らわす為に必死で努力して代表候補生になった事

「鈴、別れる前に俺が言った事を覚えているか？」

「うん、覚えてる。」

“例え別れる事になっても、お前がまた会いたいと願えば、いつかまた会える。”

彼女との別れる時に言った一夏の言葉である。

「私ね、あの言葉があったから今まで頑張ってこれたんだよ……？」

「そうか……」

「うん、そうして一夏とまた会えた。」

「ああ……」

すると、鈴は一夏に抱きついて来た。

「会いたかった……会いたかったよ、いちかあ……」

「鈴……」

そんな彼女を一夏は抱き返すのだった……

「俺は部屋に戻る。また明日だ。」

「うん・・・そういえばさ」

「何だ？」

「一夏は誰かと一緒の部屋なの？」

その質問が引き金となってしまった。

「ああ、筈とだ。」

「それって、どついう事・・・？」

先程のしおらしさは何処へ行ったのやら・・・

妙に冷たく低い声で聞いてくる鈴の眼はハイライトが消えていた。

一夏は事情を説明した。

「ねえ・・・それって、あの子と寝食を共にしているって事？」

「そつだ、幼馴染と同室で助かった。」

俯いた鈴からは何か黒いオーラの様な物が出ており、ブツブツと何か呟いている。

「—————つたら、いいわけね・・・」

「何だ？」

「だから！幼馴染だったら良い訳ね！！？」

「ッ!？」

凄まじい鈴の気迫に思わず、一歩下がってしまう一夏

“この俺を退かせるとは……”

女とは時に神すらも超える恐ろしさを発揮するのだ。

「一夏!！」

「……何だ？」

「幼馴染は二人いるって事、覚えておきなさいよ……」

そう言い残し、鈴はピットを去って行った。

「と、言う訳だから部屋代わって?」

突然、部屋にやって来た鈴が言った言葉である

「ふざけるな!何故私が!！」

寝巻に着替えた篤が鈴に怒る。

「いやあ、篠ノ之さんも男子と同室なんて嫌でしょう?」

「べ、別に嫌とは言っていない!!」

女の争いを遠巻きに見ている一夏は、下らんと書いた様子でいた。

「とにかく、私もここで暮らすから」

「ふざけるな、ここは私の部屋だ!!出て行け!!」

「ところでさ、一夏。約束を覚えてる？」

「無視するな!こうなったら力づくで・・・」

部屋に立てかけてあった竹刀を取り、鈴に振り下ろそうとした筈の腕が一夏に掴まれていた。

「落ち着け、筈。鈴も無駄に煽るな」

「う・・・」

二人共しょんぼりするのを見て、一夏は話す。

「筈、お前は頭に血が上ると、すぐに竹刀を振るうのは止める・・・」

“分かったな?”と目で叱りつける一夏

「分かった・・・」

今度は鈴の方へと向く

「約束の事だったな・・・料理が上達したら毎日酢豚を食べてくれる。

だったか・・・」

「そう、そうよー!!」

その言葉に篤は目を見開き、鈴は賭け事で逆転リーチが来た時みたいな調子になる。

「もしかして、あれはプロポーズか？」

「え、えええええつと・・・その・・・」

ここまでストレートに聞かれるとは思ってなかった鈴は混乱してしまった。

「そそそそそ、そんな訳無いじゃない!!か、勘違いしないでよね!ただの味見係なんだからね!!」

ああ・・・悲しきかな、ツンデレの性・・・

「一夏の馬鹿!アタシの馬鹿あああああつ!!!!」

そう言っただけ泣きながら部屋から出て行く鈴であった。

「・・・何だったんだ？」

「馬鹿者が・・・」

流石の篤も鈴の哀れさに涙を流すのだった・・・

翌日、生徒玄関前に張り出された『クラス対抗戦日程表』

そこに書かれていた一夏の相手は二組の代表となった鈴だった。

第七話（後書き）

あゝあゝ、やっちゃったよ・・

途中までいい雰囲気だったのに・・・

鈴ファンの方すいません

でも結局、一夏は父親的な感情しかない訳です。

鈴に対してもです。

一夏の中学時代の話、兄貴伝説は少し先で語られます。

外伝2 もしも一夏が水銀だったら（前書き）

はい、突発的に書きたくなって書きましたが、少し雑な感じがします。

そしてまさかの二ト一夏、メルクリウス一夏、水銀一夏です。

外伝2 もしも一夏が水銀だったら

「織斑一夏と言う・・・私は人前で話すのは苦手ですね・・・これ以上は勘弁して頂きたい」

IS学園に転入してきた男子は、無造作に膝裏まで伸ばした黒髪に蒼い瞳

そして芝居がかった口調で口元に薄い笑いを浮かべた少年だった・・・

外伝、もしも一夏が・・・シリーズ第二話〜水銀の場合〜

「お前はろくに挨拶もこなせんのか？」

「誰かと思えば貴方でしたか、我が姉よ。この様な形で再会するとは・・・」

「その芝居がかった口調は止める。鬱陶しい」

「ああ、申し訳ない・・・しかし、これが私の素なのですよ・・・故にご容赦召されよ。姉上殿？」

「織斑先生と呼べ・・・お前に構っていると時間が足りなくなる。

「おや、それは申し訳ない。」

そう言って水銀は席に座った。

その後、幼馴染の箒に連れて来られた水銀は屋上にいた。

「久しぶりだな、一夏」

「ああ・・・そうだな、箒。君と六年振り再会したのも、何かの縁と
言うものか」

「・・・芝居がかった口調は変わらないんだな。」

はあ・・・と、疲れたように溜息を吐きながら箒は言った。

「ああ、これが私なのでね・・・」

「そうか・・・」

「ふ、実に数奇だとは思わないかな？姉によって離れ離れになり、

その原因によって再び出会う事になると言うのも」

「間違い無く、お前だな・・・」

そう言った箒の表情は疲れていた。

「ちょっと宜しくて？」

英国の淑女が水銀に話しかける。

「何かね？お嬢さん（フロイライン）」

「くっ・・・人を馬鹿にしたような言い方ですわね。」

「すまないね。この喋り方が私なのだよ」

「まあ、良いですわ。英国代表候補生である私、セシリア・オルコットがこの様な道化師の様な男の言葉を気にする必要はありませんもの。」

傲慢な言い方であるが、その様子を見て水銀は晒っていた。

「ふふ・・・」

「な、何が可笑しいんですの!？」

「いや、失敬。君の様に振る舞う女性は、私の周りではいなかったものでね。」

「まあ、良いですわ。何か分からない事が有ったのであれば

泣いて頼まれるのでしたら、教えて差し上げててもよろしくてよ!

何せ、私は入試で唯一教官を倒したエリートなのですから!！」

「生憎、私も倒したがね・・・」

「わ、私だけと聞きましたか・・・」

「女子の中では、の話では無いのかな？」

ニヤニヤと嘲るように言う水銀

「なッ！あ、貴方も教官を倒したのですか！？」

「ああ・・・と言っても勝手に自滅しただけに過ぎんよ」

「どづいつ事ですよ！？」

「さて・・・君が知り得た所で何も変わりはないよ」

そのまま、休み時間が終わってしまう

クラスの女子達が水銀を代表にする事に同意して、それに納得しないものが居た。

「待って下さい！納得がいきませんわ！！」

机を叩きながらセシリアが立ち上がる。

「そのような選出は認められません！！大体、クラスの代表が男だなんて言い恥さらしですわ！！」

私に、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえと言つのですか！？」

更に彼女は捲し立てる。

「実力で言えば、私がクラス代表になるのは必然！」

それを珍しいからと言う理由で極東の猿にされては困ります!!

大体、文化も後進的な国で暮らすこと自体私にとっては苦痛で――」

彼女の声が水銀の晒う声によって遮られる。

「何が可笑しいのですか!?!」

「くくく、まさか代表候補生ともあるう者が他国を貶す発言をするとは・・・蒙昧無知とは正にこの事か・・・」

「何ですって!!」

「君の一人の劇はつまらないのだよ。一人だけの演劇など滑稽にしか為らんよ。」

暗にお前ではつまらないと言う水銀

「決闘ですわ!!」

そして彼女は彼の用意した舞台へと上がる事になる。

「では、最初の恐怖劇グランギニョルを始めるとしよう・・・」

セシリアの攻撃がまるで幻惑されているかの如く当たらない

「な、何故当たらないんですの!？」

「さて、何故かな?・・・言うておくが“私は何もしていない”」
水銀の掌で踊らされている彼女は、それに気づかない

「さて、幕引きにしよう・・・」

次の瞬間、セシリアのIS、ブルー・ティアーズのシールドエネルギーが0になった。

「な、何が・・・」

「さて、もう一度言うておくが“私は何もしていない”」

ゆらりと消えて行く水銀が、セシリアには分からなかった。

「本当にアレは何でしたの?」

全く理解が出来ない事態にセシリアはその場に立ち尽くしていた。

そこには不気味なほどの静寂だけが残されていた・・・

「久しぶりね、一夏。」

「ああ、今度は君に巡り合うとは・・・私も中々に数奇な運命に恵まれている様だ。」

「相変わらず、胡散臭いわね・・・」

「ふつ、他人に嫌われる事など慣れているよ」

「いや、それもどうかと思う」

水銀の仕業でツツコミに回らざるを得ない鈴

「約束、覚えているわよね？」

「ああ、君が私に申し込んだ婚姻の約束かね？」

「ふえっ！！？」

「私としては、物事には順序と云うものが大事だと思うのだがね・・・」

「にゃあああああッ！！？」

水銀に良い様に弄ばれる鈴

「乙女の純情、返せえええッ！！」

「おや、君が勝手に思い込みに過ぎんだらうっ？」

「うるさあああいつ！！！！」

「やれやれ・・・怖いものだな、乙女の怒りとは」

そこへ予想外の襲撃が来る。

「ほう・・・まさか、舞台に乱入してくるとは・・・これもまた面白い」

もの言わぬ鋼鉄の騎兵は彼の舞台で踊る。

「はははは、どうした？この程度では私の劇を超える事など出来んよ」

鋼鉄の騎兵に彼の纏う白銀の機体から凄まじい重力が襲い掛かる。

いふなれば、グレートアトラクター、ブラックホールである。

重力の渦に飲み込まれた騎兵はその力に耐え切れずに圧潰してゆく

「ふむ、この程度では足りぬ。もっと私に未知を見せてくれよ？篠ノ之束・・・」

ニヤリ、と何処かに向かって言う水銀

「助けてよ、一夏ぁ・・・」

「ああ、君の境遇は確かに不幸だ・・・ならば私は救いの手を差し伸べ、大団円にして見るのも一興か」

水銀はシャルロットにどこか恋い焦がれた歌姫の姿を見た。

「一夏のえっち・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あれ？一夏・・・鼻血が・・・鼻血がすごい事になってるよ！！」
「？」

「・・・・・・・・」

「ちよつと・・・一夏？・・・一夏！？」

「あ、ああ・・・すまなかったね。少しのぼせてしまった様だ。もう大丈夫だ。問題ない」

「凄い勢いで鼻血が出てるけど!？」

「この位で私は死なんよ・・・」

「よかった・・・」

そういつて水銀に抱き着くシャル

「・・・・・・・・・・・・・・・・ぐふっ」

「一夏あああッ!?!？」

血の海に沈む水銀

「認める物か・・・貴様が教官の弟であるなど・・・」

「くくく、ならば君は何であると言つのかな？」

銀の少女がどうやっても応えた様子が無い水銀

「どうした、私はここだが？」

「このっ！！」

「そう、いきり立っていても獣と変わらないモノだぞ？」

「黙れエエエツ！！！」

水銀の舞台上で弄ばれる銀の少女、ラウラ

「成程、VTシステムか・他人の模倣など無粋な物でしかないのだがね・・・」

水銀は必滅の審判を模造品に叩き込む。

「粗悪な模造品など存在だけ無駄だ。」

そしてラウラは水銀に宣言する。

「お前を私の嫁にする！！！」

「・・・まさか、この私が驚きで固まる事があったとは」

臨海学校にて

「ふむ、この恰好が落ち着く」

「『『『露出狂かよ！！？』』』」

裸にボロ布一枚の格好にツッコミ所が満載だ。

そして出会うは水銀と天災

「久しぶりだ。束殿」

「はろっいっくん。相変わらず暗いね」

「ふっ、貴方はいつも子供の様だ。」

お互い不思議な関係で繋がっている水銀と天災

「さて、貴方は私に何を見せてくれるのかな？」

これは水銀のメルクリウスが送る、ニート的な愛が詰まった劇場である。

外伝2 もしも一夏が水銀だったら(後書き)

さて本編のゴーストはとうとうか・・・

外伝3 もしも一夏が白騎士だったら(前書き)

はい、第八話の中身が中々まとまらないので時間稼ぎの為の外伝です。

今回はヒロイ입니다。

すごいねシュライバー

では、ごきげん

外伝3 もしも一夏が白騎士だったら

「僕の名前は織斑一夏って言っただ。よろしくね。」

IS学園に入学した男子は銀髪で片目に眼帯をした男の娘であった。

外伝、もしも一夏が・・・シリーズ第三話〜白騎士の場合〜

「「「きゃあああああああ!」「「「「

「まさかのシヨタっ子!!」

「可愛い!食べちゃいたい!!」

「ぐふふふ・・・じゅるり・・・」

可愛い男の娘に色めき立つクラスメイト達、すると・・・

「騒がしいな、このクラスは変態を集めたのか?」

そう言って、一夏の姉である千冬がやって来たのを確認した一夏は

「お姉ちゃあああああん!!--!!」

その宣言に衝撃を受ける全員

そして、その宣言を一夏に恋する乙女が許す筈がない

「ちよ、千冬さん。何を言っているんですか！？一夏は私のです！
！」

「ここでは織斑先生と呼べ、篠ノ之。こいつは最初から私のだ。」

何か二人の間で妙な争いが勃発し始めた。

それを真耶はおろおろしながら見ているだけだし、クラスの女子は面白そうに観戦しているだけだった。

そして、未だ千冬の胸に張りついている一夏は・・・

「・・・んう？」

千冬の胸から顔を離して箒の方を見ると・・・

「ほ~~~~う~~~~き~~~~い

物凄く甘ったるい声を出して飛びついた。

「のあああつ！！？い、一夏！？」

「ん~~~~？ 久しぶりだねえ、箒」

箒の胸にすりすり顔と顔を埋めながら嬉しそうな表情で箒を見上げる

一夏

「ブハアツ!!!!」

箒も千冬と同様に鼻から愛を噴きだした。

そして阿鼻叫喚の場へと化した教室でのSHRは二人の負傷者を出しつつも、終わったのだった……

そして屋上で改めて再会の挨拶をする一夏と箒

「久しぶりだね、箒。六年振り!!!」

「ああ、お前は相変わらず、そのままなんだな」

箒の言うとおり、一夏の身長は140後半で止まっていた。

「うん、何か成長が止まっちゃったみたいなんだ。箒は大きくなっ
たねえ」

そう言って、箒の胸を見る一夏

「ど、どこを見て言っている!!!」

恥ずかしそうに箒は腕で胸を隠す。

「ねえ、箒……」

「何だ？」

「また、抱きしめて？」

「ッ!？」

思わず、鼻を抑えて愛が噴き出さないようにする筈

久しぶりの幼馴染の無垢な懇願は相当効いた。

「あ、ああ・・・良いぞ。」

「うわぁい!!」

物凄く嬉しそうに抱き着いてくる一夏はとにかく可愛かった。

「ふふ・・・何時まで経っても抱きしめられるのが好きなんだな・・・

」

「僕はいっぱい愛して欲しいんだ。だから・・・」

「ああ、分かってる。好きなだけ抱きしめてやる。」

「やったぁ！大好きだよ筈」

「ブファッ!!!!」

流石にこれには耐えきれ無かった筈でした。

すると・・・

「お前達何をしている?」

千冬が屋上へとやって来た。

「ち、千冬さん!？」

「織斑先生だ。・・・言った筈だ、一夏は私の物だとな。」

「ここまで来るとは・・・貴方に一夏を渡しはしない!!」

「ふっ、小娘が・・・私から一夏を奪えるところでも思ったか!!」

直後、チャイムが鳴った。

「む、行くぞ。一夏」

「うん。」

「えっ?・・・あっ!？」

いつの間にか筈から一夏を奪取していた千冬が、彼を抱えて教室へと戻って行った。

「くっ、待てえええええッ!!!!」

必死でそれに追いつがる筈の姿があった。

二限目の休み時間

「ちょっと、よろしくて?」

「ん?なあに?」

「なんですの!そのお返事。私に話しかけられるのも光栄なのですからそれ、相応の態度と言つ物があるのでは無いかしら?」

「ごめんね?君が誰だか知らないや」

「な、何ですつて!?英国代表候補生にして、入試主席である。このセシリア・オルコットを知らないですつて!」

「だって、お姉ちゃんと筈しか覚えてないから」

「なあ……!」

予想外の事態に硬直してしまうセシリア

すると、一夏は彼女を見てから

「えいつ!」

おもむろに抱き着いた。

「なああああああッ!?!」

突然抱き着かれて混乱するセシリア

彼女のそんな様子に構わず、一夏は彼女の胸をすりすりする。

「んんん〜いい匂いがする・・・」

「なっ、嗅がないで下さい!!--」

「だって、セシリアからいい匂いがするんだもの・・・」

「ちょ、止め、あふうん・・・」

彼女の体を弄りだす一夏

「ん〜ここかなあ?」

「ひあああツ!!!?」

むにむに、と彼女の形の良い尻に手を這わせて揉む一夏

いきなり始まった耽美な劇場に、鼻息荒くして見守るクラスメイト達

「うん、手はここがいいかな」

そう言っつて彼女の尻を揉みまくる一夏

「は・・・あ・・・ああ・・・」

セシリアは結構トリップした表情になっていた・・・

しかも、顔が真っ赤に染まり、目は蕩けて、全身を震わせている。

このまま最後まで行くかとクラスの全員が思っていたら、無粋にもチャイムが鳴るのだった。

「はふう……」

荒い息を吐いてへたり込むセシリアを抱っこして、彼女の席に戻してあげるよ

一夏も自分の席に戻るのだった。

その姿を恨めしそうに見る筈に気づかず……

まあ、原作通りにクラス代表が一夏になりそうになって、セシリアが納得せずに立ち上がった。

しかし、文句をいう事は無く、ただ立候補しただけであった。

まあ、ウォルフガング・一夏・シュライバーにキラキラした目でジイイイと凝視されたからであるが……

多分、彼女は彼に苦手意識を持ったか、どこぞのエロ漫画の如く、見られて快感がフラッシュバックしたか

彼女の表情からして、本当に前者だろうか……？

どうやら一夏は無自覚でセシリアを調教してしまったらしい

恐るべし、ウォルフガング・一夏・シュライバー

そして決闘することになった。

その際、千冬が一夏に向けて言った。

「殺すなよ？・・・分かっているな？」

「うん・・・頑張ってみる・・・」

“本当に彼女も災難だな”とセシリアに同情する筈であった。

昼、食堂に来ていた一夏と筈は適当な席に座っていた。

「お前は弁当なんだな」

「うん、料理するのは嫌いじゃないしね」

彼の弁当は何故にかドイツの家庭料理が多かったが、それ以外にも種類が豊富にあつて

彩りも豊か。そして味は抜群だった。

そのことは良いとして・・・

「何故いるんですか？」

「うん？ここは食堂だ。教師が利用していても、おかしくは無いだろ」

そう言つて一夏の隣にいる千冬はラム肉のローストを口に運ぶ

「美味しいぞ、一夏。」

「良かった。お姉ちゃんに褒めてもらつと嬉しいな」

このバカカップル姉弟はご満悦の様子だった・

「一夏、私にも一口くれないか？」

「いいよ。あ〜ん」

「あ、あ〜ん」

一夏は筍にあ〜んしてグラタンを食べさせた。

「美味しいな・・・」

「そう？なら良かった。」

ニッコリ笑顔の一夏に筍もご満悦だった。

「ずるいぞ、一夏。私にもあ〜んして食べさせる」

「うん、いいよ」

「わ、私も」

結局、三人であ〜んしながら昼食を食べ終えたのだった。

放課後、千冬に連れられてきた部屋は寮長室だった。

「今日からお前は私とここで暮らすんだ。」

「分かった。で、荷物は？」

「もう、運んである。」

そう言って二人はベッドに腰掛ける。

「あれ？ベッドが一つしかないよ？」

「問題ない、お前と私が一緒に寝ればいい。お前は私専用の抱き枕だからな」

その言葉を聞いて喜ぶ一夏

「やった、お姉ちゃんと一緒だ。」

どうやら彼もダメコンである。

「一緒にシャワーでも浴びよう」

「うん！！」

一緒にシャワーを浴びて、一緒にベッドで抱き合って寝る。

もう手遅れなレベルだった・・・

元から彼は愛されなかった前世だった為に愛して欲しいと言う思いが強く

幼い頃からひたすらに愛を求めた。

くした。

そこへ迎えに来た千冬を見て、棄権した事を知ると泣きながら必死に謝り続けた。

千冬は優しく抱きしめてくれた。栄光よりも自分を選んでくれた。

その事に一夏は歓喜した。

“ならば自分は彼女の為の牙だ。この力の全てを彼女が愛する者の為に使おう”

これがウォルフガング・シュライバーが織斑一夏として生まれて、誓った事である。

そして決闘当日

「はははははッ、織斑一夏、総てに於いて我が姉に愛と忠誠を誓った。不死の白騎士!!」

「——ッ!!!?!」

一夏から凄まじい殺気が溢れ出す。

「泣き叫べ、劣等。此処に、神はいない」

そしてスラスターを全力にして突っ込んでゆく。

「僕が一番最初の姉の牙だアアアッ!!!!!!」

「くっ!!」

セシリアの持つ、スターライトMk-?からレーザーが放たれるがそれを総て躲しきる

「くっ、早すぎますわね・・・」

これでは当たらないと即座に判断したセシリアは切り札を出した。

「お行きなさい!ブルーティアーズ!!」

彼女のISの名を冠するビットが放たれ、それぞれが独立機動で彼にレーザーを放つ

「ああああああアッ!!!!」

それすらも躲してゆくが未調整の機体である為、手一杯だった。

“負けてたまるか、負けたらお姉ちゃんにまた恥をかかせる・・・それだけは許せない”

その狂おしいまでの渴望はISである白式に

彼の聖遺物であり、今は力を失いしツェンダップが融合する。

その光りの中から生まれたのは、純白にして禍々しい騎士だった。

「なっ、一次移行ですって!?!まさか貴方、今まで初期設定で戦っ

ていたのですか!？」

セシリアの背に冷たい物が流れるのを感じた。

初期設定ですら、あの機動なら彼に合った状態の今ならどうだ？

白騎士を縛る枷は外れた。

今ここに最速の騎士が復活した。

F a h r ' h i n , W a i h a l l s l e n c h t e n d e
W e l t

——さらば ヴアルハラ 光輝に満ちた世界

Z a r f a l l ' i n S t a u b d e i n e s t o l z e
B u r g 聳え立つその城も —— 微塵となって砕けるがいい

L e b ' w o h l , p r a n g e n d e G o t t e r p r a c
h t

——さらば 栄華を誇る神々の栄光

E n d ' i n W o n n e , d u e w i g G e s c h l e c
h t

——神々の一族も 歓びのうちに滅ぶがいい

—— B r i a h

—— 創造

N i f l h e i m r F e n r i s w o l f

—— 死世界・凶獣変生

素っ裸のまま抱きしめられ撫でまわされるシャル。ご馳走様です。
どうやら触り癖や弄り癖がついたらしい

「久しぶりだな、嫁」

「うん、クラツリサは元気？」

「ああ、いつも通りだ。お前の写真を見て鼻血を噴き出していた。」
ラウラと一夏は仲が良いらしい

「許せないなあ・・・ラウラにこんな事して・・・ああ、許せないなあ・・・」

VＴシステムに取り込まれたラウラを救うべく白騎士は突撃する。

「う~~~~~み~~~~~だ~~~~~ああああああああ！~！」

物凄い速度で走り回る一夏

「織斑キュンの裸・・・ハアハア」

「ああ、食べたい・・・」

「ってか、あれ水の上を走ってない？」

「「「まあ、織斑君だし」「」」

そんなんでいいのか!?!どうやら一組は常識が永劫破壊されてしまった様だ。

「一夏さん。サンオイルを塗ってくださいまし」

「いいよ、それじゃあ塗るよ」

「ああん!一夏さん。そこはああああ!?!?!」

なんでもピンク色のイベントにする一夏

「一夏、どうだ?」

「似合っているよ、お姉ちゃん」

「そうか。選んでくれた褒美だ。一緒に風呂に入ってやるぞ」

「やったあッ!?!」

「「「「私も!?!」」」」

もう駄目っぽいな・・・

「みんなとお風呂だ〜〜!?!」

クラスの全員と入る事になった風呂

「ちょ、止め!ああん!?!」

「やあああん!?!」

「うわ~~~~~い!!」

風呂場でもう好き放題やっちゃうー夏

「久しぶり、いつくん」

「東お姉ちゃん!!」

「ふあああああつ!!」

天災でも一夏の前では意味が無い

「クラフトオオオオオツ!!!!」

水銀の手がけた舞台で墜ちる白騎士

Vor?ber, aach, vor?ber! geh, wiler knochenmann!

——ああ わたしは願う どうか遠くへ 死神よどうか遠くへ行つてほしい

Ich bin noch jung, geh, Lieber! Undr?hre mich nicht an.

——わたしはまだ老いていない 生に溢れているのだからどうかお願い 触らないで

Gib deine Hand, du sch?n und zart Gebild!

——美しく繊細な者よ 恐れることはない 手を伸ばせ

B i n F r e u n d u n d k o m m e n i c h t z u
s t r a f e n .

―― 我は汝の友であり 奪うために来たのではないのだから

S e i g u t e n M u t s ! I c h b i n n i c h t
W i l d ,

―― ああ 恐れるな怖がるな 誰も汝を傷つけない

s o l l s t s a n f t i n m e i n e n A r m e n s
c h l a f e n !

―― 我が腕の中で愛しい者よ 永劫安らかに眠るがいい

―― B r i a h

―― 創造

N i f l h e i m r F e n r i s w o l f

―― 死世界・凶獣変生

そして発動する真の詠唱による創造

「お姉さんに興味はある？」

「うん！！」

「ちょ！きゃあああああ！？」

「生徒会長のおっぱいも大きいな〜〜」

「いやあ、ダメEEEEEEE!!」

学園の生徒最強だろうが一夏の前では意味が無い。

これはウォルフガング・シュライバーが新たな人生で得た愛の物語である。

外伝3 もしも一夏が白騎士だったら（後書き）

千冬姉のプラコンが酷い事になっています。

一夏くん、もう女相手に無双です。

第八話（前書き）

今回もまた創造が出ます。

そしてまさかの事も・・・

とりあえずお楽しみください、どうぞ

第八話

クラス対抗戦の初戦で鈴と当たった一夏は考え込んでいた。

わずか二年の間で一般人だった鈴が代表候補生になったのだから

その実力はセシリアと同等か、それ以上か

「む・・・？」

すると廊下の曲がり角から鈴がやって来た。

「おはよう、鈴」

「っ！」

何故にか紅くなってプイと顔を背けられてしまった。

「・・・・・・？」

“何故だ？・・・嫌われたのか？”

さっぱり理由が分からない一夏

それが彼たる所以だろう

「直接、聞いてみるか・・・？」

そう考えたが彼女の問題だと思い、止めておいた。

第八話

それから数週間が過ぎたが、鈴の機嫌はよく分からない状態のままだ。

とりあえず一夏は“女はよく分からん”と言う結論に至った。

クラス対抗戦を一週間後に控えた日の放課後、箒とセシリアを連れてアリーナに向かっていた。

「一夏、来週からいよいよクラス対抗戦が始まるぞ。アリーナは試合用の設定に調整されるから、実質特訓は今日で最後だ。」

「ああ・・・だが、箒も上達したな」

「そ、そうか？」

その言葉に少し照れる箒

“後は渴望を理解さえすれば、創造も使えると思うが・・・”

創造は専用機の特権みたいなものである。

誰もが使用する量産機では上手く発動はしない

一次移行する事で創造は使用することが可能になるのだから

「一夏さんも上達してますわ。動きに無駄が無くなってきてますもの」

「要は慣れ、と言う事なのだろうな・・・」

二人の相手をしながら、アリーナのピットへと向かう

重厚なドアが開くと中には鈴が居た。

「待っていたわよ、一夏！！」

腕組みして不敵な表情を浮かべながら立っている。

「貴様、どうやってここに！！」

「ここは関係者以外立ち入り禁止ですわよ！！」

「はん！私は関係者よ。一夏の関係者。だから問題無しね」

ぎゃあぎゃああと騒ぐ三人を余所に一夏は

「こづいっ騒がしさも悪くは無いか・・・」

と、しんみりしていた。

粗方口論が終わった後、一夏は鈴に話しかけた。

「鈴、大丈夫か？」

「えっ？」

「もう無理はしてないな？」

一夏としては彼女の心の傷が心配だった。

「うん、大丈夫・・・ありがとう」

「なら、良い・・・」

「鈴・・・」

「何？」

一夏は戦士の表情で鈴に言う

「お互いに有意義な試合をしよう」

「ええ、アタシの強さを見せてあげるわ」

「それは楽しみだ。」

鈴の自信満々な表情を見て、やっと調子が戻ったなと実感する一夏

「なら、ここで戦って手の内を晒すのは面白くない」

「そうね、楽しみは当日だね。」

そう言っつて鈴は去って行く

「セシリア、第・・・」

「何だ？」

「何ですか？」

一夏は二人に言う

「俺たちの強さ、見せるぞ」

「ああ！」

「ええ！！！」

三人はしっかりと決意した。

試合当日

第二アリーナ第一試合、織斑一夏と凰鈴音の試合は注目度も高く、観客席は満員だった。

この試合は各国の要人からも注目されている試合だ。

一夏は腕を組みながら、その時を待っていた。

その視線の先に居るのは、中国第三世代のIS『シエンロン甲龍』を纏った鈴赤紫の機体色にゴツイ装甲、明らかにパワー型な外見である。

肩の所に浮いた非固定浮遊ユニットが気になるが・

“そろそろか……”

一夏が腕を降ろし、拳を握りしめる。

『それでは両者、既定の位置まで移動して下さい』

アナウンスに従って、両者とも地上5メートル程上空に飛び、向かい合う。

「一夏、代表候補生の實力見せてあげるわ」

「ああ……見せてみる。お前の力を」

『それでは両者、試合を開始して下さい』

アナウンスが聞こえたと同時に動いたのは、どちらだったか……

二人は一気に己の得物を展開して切りかかり、鏝迫り合いになるのを避けるため。

力を上手く利用して、後ろへと下がり宙返りして体制を整える。

「へえ・・・流石、一夏ね。その化け物じみた強さはISでも変わり
は無いのね。」

でも・・・と鈴は両手の青龍刀、双天牙月をバトンの様に回して、あ
らゆる方向から切りかかってくる。

「くっ・・・」

その変幻自在な斬撃の嵐に流石の一夏も捌ききるので手一杯だった。

“接近戦は不利か・・・この俺が防戦一方とは・・・”

一夏の判断は素早かった。

—— B r i a h

創造

I c h g e b e e i g e n e n W e g D i e W e l t
d e s B r u d e r s

—— 我捧ぐ・姉弟世界

即座に高速詠唱で創造を発動して技量を上げ、彼女の斬撃をいなし
て隙を作る。

「ッおおお!!」

片方の双天牙月をいなし、もう片方を足で刀身を横から蹴り飛ばす。

「ッ!!!」

突然、一夏の技術が上昇し、二振りの青龍刀が弾かれてしまい、隙を見せてしまった鈴。

しかし、その表情に焦りは無い

気が付けば、甲龍の肩アーマーがスライドし、そこから出てきた球体が光った直後

一夏は見えない拳に殴られたかのような衝撃に吹き飛ばされた。

「ぬう・・・!!!?」

そのまま、鈴との距離が引き離されてしまう

更に目に見えない衝撃が次々と一夏に襲い掛かる。

が、一夏は持ち前の勘で次々と回避して行く

「良く躲したわね。この“龍砲”は砲身も砲弾も見えないのが特徴なのに・・・」

“成程、確かに厄介だ・・・しかし、まだ未熟だ”

確かに見えないのは厄介だ。

ならば、撃つ人間を見れば良い

人間には必ず予備動作が存在する。

そして、この場合は・・・

「視線だ。」

彼女の視線が自分を捉えている瞬間を測って躲す。

「嘘、もう対応したって言うの!!!??」

「・・・射撃武装を使うのならば、視線無しで狙うんだな」

そう言つて砲撃の合間を勘と視線だけで掻い潜つて一気に距離を詰めて行く。

「この!!」

それを迎撃せんと龍砲を最大チャージで放とうとするも

「甘いな」

彼女の視界から一夏が消える。

「——ッ!!!??」

一夏は瞬間加速イグニッションブーストを使用して彼女の上へと飛び上がったのだ。

そのまま“零落白夜”の刃を振り下ろす。

「オオオツ!!」

その刃が彼女を捉える直前

閃光が彼等の戦いに割って入った。

「何・・・!?!?」

一夏は口元を歪ませて、それを見る。

それは異形の姿だった。

巨大で異形、それからは人の気配は感じられない

しかし、それから感じるモノを一夏は知っている。

「何故・・・貴様が・・・」

ソレは自分たちを嘲笑うかの如く、腕から強力なビームを放ってきた。

「試合は中止よ!一夏、アンタ狙われている!!」

「分かっている!!」

一夏がいつもよりも声を荒げている。

その表情もいつもの無表情では無く、口元を歪ませて腹立たしげな表情である。

「どつしたのよ!?!アンタがそんな顔をするなんて・・・」

鈴の言葉など耳にも入らない

「何故だ・・・何故貴様がここに居る!!」

カール・クラフト 〓 メルクリウス!!

“ふふふふ、さて・・・何故かな?”

頭の中に直接響いてくる声を不快気に聞く一夏

「何故ここに居るかなど聞く必要は無かったな・・・お前は殺す。」

“やってみるがいい・・・”

「オオオオオオオオツ!!!」

咆哮を上げながら一夏は異形のISに切りかかる。

対する相手も腕からビームを連射して寄せ付けない

が、しかし一夏は全てのビームを躲して突撃する。

“やはり、元々の性能では歯が立たないか・・・では、これはどうかな?”

次の瞬間、敵の姿が消えた。

「——ツ!!!??」

その感覚は覚えている。

これは・・・

「一夏、後ろ!!」

自分の後ろでは奴の腕が光っている。

しかし、対応しようにも体が重く動いてくれない

“不味い・・・”

その光が放たれる瞬間、それは聞こえた。

——創造

鈴には何が何だかよく分からなかった。

あの無表情な一夏が怒りの表情で異形のISに切りかかって行く。

「一夏!!!?」

敵の腕から放たれる高出力のビームの隙間を掻い潜るようにして突撃してゆく一夏

しかし、そこで異変は起きた。

敵のISの雰囲気が変わったと思ったら、一瞬にして一夏の後ろに回り込んでいたのだ。

「一夏、後ろ!!」

思わず声を上げるが、一夏はまるで重力に縛られているかの如く動かなかつた。

敵の腕が光、至近距離でビームが放たれようとしてる。

それを見た瞬間、ありとあらゆる物が彼女の中で停止した。

“一夏が死ぬ？・・・また別れるの？・・・二度と会えなくなるの？・・・”

彼女は恐怖する。織斑一夏との別れを

“嫌だ！もう別れたくない！！また会えたのに今度は二度と会えなくなると言っのか！？”

彼ともう一度別れる事など耐えられない

故に彼女は渴望する。“彼と別れたくない”と

そして、彼女の創造は完成する。

好花不常開

——よき花常には咲かず

好景不常在

——よき運命常にはあらず

愁堆解笑眉

——愁い重なれど面に微笑み浮かべ

淚洒相思帶

淚溢れてひかれる想い濡らす

今宵離別後

今宵別れてのち

何日君再来

いつの日君また帰る

喝完了這杯

乾ませこの杯を

請進点小菜

召ませこの小皿

人生難得幾回醉

人生幾度酔う日有らんや

不歡更何待

ためらうことなく歡びつくさん

来来来、喝完了這杯再説？

さささ、この杯乾して　いまひとたび語りましょう

今宵離別後

今宵別れてのち

何日君再来

いつの日君また帰る

創造

—— 創造

告別無永恆世界

—— 告別無き永遠世界

次の瞬間、一夏は敵の動きが停止している事が分かった。

それは・・・

「鈴！」

「一夏と、また別れるなんて許せないんだからぁ・・・」

甲龍の龍砲から不可視の糸が伸びており、それが敵の動きを停止させていた。

“成程、やはり面白いな・・・”

「ッ!!!?!?」

どうやら、その声は鈴にも聞こえたらしい

彼女の“別れたくない”という渴望から生まれた創造の効果は停滞と引き寄せる事だ。

「うぁぁアアアアッ!?!?!」

一気にその糸で敵の機体を引き寄せた鈴は、そのまま双天牙月で切り裂いた。

胴体から両断される敵のIS

しかし、その銃口から光は消えていなかった。

「鈴!!」

一夏は真の創造を発動する。

発動、単一使用能力：零落白夜

そして彼は詠唱する。

彼の嘗ての創造を発動するために

BGM：Einherrjar Nigredo

Tod! Sterben Einzige Gnade!

死よ 死の幕引きこそ唯一の救い

Die erschreckliche Wunde, das Gift, ersterbe,

この毒に穢れ蝕まれた心臓が動きを止め

das es zernagt, erstarrte das Herz!

忌まわしき毒も傷も跡形もなく消え去るよつに

Hire bin ich, die of 'ne Wund
e hier!

この開いた傷口 癒えぬ病巣を見るがいい

Das mich vergiftet, hier flies
st mein Blut:

滴り落ちる血のしずくを 全身に巡る呪詛の毒を

Heraus die Waffe! Taucht eure
Schwerte.

武器を執れ 剣を突き刺せ

tief, tief bis ans Heft!
深く 深く 柄まで通れと

Auf! Ihr Helden:

さあ 騎士達よ

Totet den Sunder mit seiner Qu
al,

罪人にその苦惱もろとも止めを刺せば

von selbst dann leuchtet euch
wohl der Gral!

至高の光はおのずからその上に照り輝いて降りるだろう

Briah

創造

Mi?gar?r V?lsunga Saga

一夏の両腕が雪片式型と一体化する。

そして輝くは彼の両腕

「オオオオオオオツ!!!」

凄まじい速度と共に一夏が鈴の命を狙う敵へと幕引きの一撃を放つ

“ふっ、見事だ・・・黒騎士・・・また会おう”

そう言っつて水銀の気配は異形から消えて行くのだった。

「う・・・」

久しぶりにこの創造を使った反動が猛烈な疲労感が彼を襲った。

そこで一夏は気を失うのだった。

「む・・・?」

「ようやく気が付いたか・・・」

気が付けば、自分は保健室で寝ており、近くに千冬が居た。

「それと・・・お前は言ったな・・・カール・クラフト Ⅱ メルクリ
ウス・・・」

「・・・・・・・・」

「誰の事だ？」

「篠ノ之束に協力し、創造を付けた張本人だ。」

「成程・・・束の関係者か・・・だが、お前と何の関係がある？」

「・・・・・・・・」

その言葉に一夏は目を逸らす。

「お前があれ程、怒った所は見たことが無い・・・」

「・・・いつか、話せるときが来たら話す。」

そう答えるのが精一杯だった。

「・・・まあ、良い・・・お前が無事ならな」

すると、直後に三人が保健室に飛び込んできた。

「一夏、無事か！！？」

「一夏さん、お身体の方は！？」

「一夏、大丈夫なの！？」

騒がしくやって来た三人に拳骨を喰らわせた千冬は

「一夏、休めよ」

そう言って、三人を連れて出ていくのだった。

ベッドに横になりながら考える一夏

“まさか、あの男がやって来るとは・・・何が目的だ？”

そう考えている内に一夏は眠りに就くのだった……………

その翌日

「織斑君、お引越しです。」

真耶にそう言われて、一夏は一人部屋に来ていた。

すると、ドアがノックされた。

「私だ。一夏。」

「どうした？ 筈、入るか？」

ドアを開けて彼女を中に入れようとする

「いや、ここがいい……………」

「一夏!!」

「何だ？」

「ええと、だな・その・」

珍しく篤が言い淀んでいる。

「何だ？」

「ら、来月の学年別のトーナメントだな・」

「ああ・それがどうかしたか？」

「わ、私が優勝したら――」

「？」

「付き合ってもらっつツ!!!!」

その言葉を理解するのに一夏はしばしの時間を必要とした。

「は？」

「で、ではな!!」

そう言い残して篤は自分の部屋にすっ飛んで行った。

残された一夏は・・・

「・・・・・・・・何処にだ？」

全く意味を理解してなかった。

駄目だこりゃ・・・

しかも・・・

「ふ~~~~ん、これは良い事聞いちゃった〜」

着ぐるみの様なパジャマを着た少女に聞かれていた。

第八話（後書き）

出てきました。人世界・終焉変生

これは単一使用能力と創造を合わせる事で発動が可能です。
しかし、やっぱりエネルギーは食います。

鈴の創造の詩は 黄嘉謨の詩、何日君再来です。
これは結構有名な詩で歌われてもいます。

閑話（前書き）

この話は一夏達とは別の所の話です。

色々和本編に絡んでくるキャラクターが出てきます。

閑話

とある基地の執務室である映像が再生されていた。

それは世界唯一のIS操縦者である織斑一夏と中国代表候補生、鳳鈴音との試合の映像だった。

そして乱入する謎の大型IS

発動する鈴の創造、そして一夏の創造

閑話 黒円卓の部隊

それを見ていた男は一緒に映像を見ていた女性に聞く

「ふむ、どう思うかね？」

「この織斑一夏は確実にマキナだと思います。この創造は奴以外にあり得ません。」

「やはりか・・・しかし妙な物だ・・・」

男は呟く

「私もこの世界に来てから既知を感じる事は無くなった。しかしカールは何故、ISの
コアに永劫破壊の術式を組み込んだのか・・・」

女は答える

「さあ、それは分かりません。ですが、あの男の事です。碌でも無い事でしょう・・・」

男は聞く

「それと、亡国企業の方はどうなっている？」

「申し訳ありません。我が軍の内通者を未だ見つける事は出来ておりません・・・」

女は申し訳なさそうに言う

「そうか・・・」

男は座っている椅子に腰掛け直すと言った。

「たしか黒兎の部隊の隊長がIS学園に転入する事になっていたな・・・」

「その通りです。ラウラ・ボーデウィツヒ、私の教え子でもありません。」

「ふむ、そうか・・・ならば卿等にもIS学園へ行って貰いたい」

その言葉に女はビシツと敬礼を返した。

「ハツ、了解しました。命令の内容は？」

「ラウラ・ボーデウィツヒ少佐の御目付役だ。」

「彼女は軍人ですが・・・」

その言葉に男は言う

「彼女は軍人であれ、未成年だ。それに彼女の周りが何やら怪しい」

「成程、内通者が彼女にちょっかいを出す可能性がある・・・」

「ああ、それにマキナとも再会してくるがいい」

「ハツ、了解しました。ハイドリヒ中将閣下」

「うむ、頼んだぞ。ヴィツテンブルグ大佐」

嘗ての黒騎士の同僚は再会の運命を辿る。

「と言う訳だ。貴様等も準備をしておけ」

「大佐、いきなり過ぎて酷いですよ。」

エレオノーレ・フォン・ヴィツテンブルグ大佐は

己の副官であるベアトリス・ヴァルトルート・フォン・キルヒアイ

ゼン少佐に文句を言われた。

「ほう・・・口答えとは随分と偉くなった物だな？キルヒアイゼン・・・」

ギロリと副官を睨みつけるエレオノーレ

「ヒイヒイッ！?!？ち、違いますよ！話が急すぎるっただけで・・・」

「やかましい、とつとと用意しておけい!!」

「はいヒイッ!!--」

脱兎のごとく走ってゆくベアトリス

「お前もだ。シュライバー」

「えっ？ボクも・・・?」

銀髪ショートヘアで右目に眼帯をしたボーイツシュな少女が聞く

「お前はボーデウィツヒと知り合いだろう?」

「ああ・・・ボクも代表候補生だから行けと?」

「まあ、そついう事だ。どつやら、あの忌々しいニートも絡んでい
る様だしな」

その言葉にシュライバーが反応する。

「やっぱり、ISコアにエイヴィヒカイトを仕込んだのって」

「ああ、十中八九アイツだろうな・・・」

二人とも苦々しい思いで言う

「でも、豪華すぎやしないかい？代表候補生が二人、更にはドイツ国家代表で第二回モンド・グロツソ優勝者のザミエルがIS学園に行くなんて、上が黙ってないんじゃない？」

「いや、ハイドリヒ卿が上手く抑えてくれるそうさ。」

「でも、此処の事は良いの？亡国企業の動きは分かってないよ？」

すると、エレオノーレは晒って言う

「フツ、此処が襲われて易々と落ちると思うか？」

「んゝあり得ないね。いざとなったら、ハイドリヒ卿が動くし」

アンナ・シュライバーは絶対の自信を持って言う。

「それに・・・あの女と久しぶりに会う事が出来るからな・・・」

「ああ・・・ブリュンヒルデの事か・・・」

彼女とは決勝戦で戦う予定だったのに、彼女が棄権した結果、不戦勝で優勝

この時、エレオノーレのプライドが大きく傷つけられた。

非公式でその後、決着をつけたが結局負けた。

しかし中々の名勝負だったとラインハルトは述べている。

「後、ハイドリヒ卿と昔……」

「それ以上言ったら殺すぞ？」

うわぁ……明らかに嫉妬してるよ……でも、これを忠誠心って言ってるから、他の女にとられるんだよ……

と、シュライバーは思ったが口には出さない。

彼女等はラインハルト・ハイドリヒ中将直轄部隊・聖槍十三騎士団

男の身でありながら、そのカリスマと天才振りに二十代後半で中将まで上り詰めたラインハルト・トリスタン・オイゲン・ハイドリヒが創り上げた部隊である。

そして世界最強クラスのIS部隊としても有名である。

隊長にドイツ国家代表エレオノーレ・フォン・ヴィッテンブルグ大佐

副官にベアトリス・ヴァルトルート・フォン・キルヒアイゼン少佐

副隊長にアンナ・シュライバー少佐、代表候補生

と、専用機持ちが三人いる部隊である。

おまけに創造まで持っている為、無敵である。

「さて、貴様等行くぞ。IS学園へ!!」

「だから、早すぎますって大佐あゝ!!」

「マキナと久しぶりに会うけど、おもしろい事になってるんだろうね・・・」

何というか、少々人格的に不安の残る面子だった・・・

そして、それを見送るラインハルト

「さて、カールよ。卿は未知溢れるこの世界で一体何を為すつもりなのか・・・」

そう言ったラインハルトの机に置いてある写真には二人の男女の姿があった。

一人はラインハルト、そして、もう一人は・・・・・・織斑千冬だった。

閑話（後書き）

さて、獣殿と千冬は昔・・・何があつたかは言いませんがわかりますよね？

外伝4 もしもシャルが断頭の歌姫だったら（前書き）

今回は短いです。

ではどうぞ

外伝4 もしもシャルが断頭の歌姫だったら

「シャルロット・デュノア・・・よろしくね!!」

IS学園に転入してきたのは長髪にほんわか天然さんだった・・・

もしもシリーズ 第四話 断頭の歌

姫の場合

「よろしくね。イチカ」

「お、おう・・・?」

何故にか一緒に部屋になっってしまう一夏とシャル

大浴場にて一夏が風呂に入っていると、ガラリと戸が開いた。

「のわっ!!?!?し、シャルロットさん!!?!?」

「イチカ・・・?」

慌てて前を隠す一夏だが、そんなことに構わずシャルは湯船に入る。

「あの・・・シャルロットさん？」

「シャルでいいよ？」

「えつと・・・じゃあシャル」

「なあに？」

純真無垢な瞳で一夏を見るシャル

「何で入って来たんだ？今は男子の使用時間だろ？」

「イチカと入りたかったから」

「んなあ！？」

余りの事に呆然としてしまう一夏

「いや、その・・・恥ずかしくないのか？」

「うん・・・恥ずかしくないよ？」

あっけらかんと返すシャルにため息を吐く一夏

仕方ないばかりに、そのまま一緒に入る事にした一夏

「・・・そういえばさ、シャルの家ってどんな感じなんだ？やっぱり豪華とか？」

「ううん、違うよ？」

彼女は今までの境遇を何事も無かった様に話す。

一夏は信じられなかった。彼女の境遇がでは無く

彼女から全く怒りや悲しみと言った負の感情を感じなかった事にだ。

正に純真無垢、何も知らないままに育った真つ白な少女。

「シャル……」

「なあに？」

「お前は本当にそれでいいのか？」

「……？」

だから一夏は彼女に愛情を教える。

「良くねえだろ！お前はもっと知るべきなんだ！愛情って奴を」

「愛情……？」

「ああ、優しくて温かい物だ……」

彼女は聞く

「どっやって知ること？」

一夏は答える。

「俺が教えてやる。」

その答えに彼女は・

「うん、わかった。ありがとうイチカ」

「ああ・・・どういたしまして」

ここに断頭の歌姫と一夏の契約は成された。

「とりあえず、抱き着くのを止めてくれませんかね・・・？」

「どうして？なんか固くなってるよ？」

「ちよっ！？弄るな！ストップ！止めて！・・・あふう！！！」

「あ・・・動いた・・・おもしろい」

「やめてえええっ！！これ以上されたらナニカが終わっちゃっううう
うッ！！！！！」

一夏の受難は始まったばかりだ・・・

これは織斑一夏と断頭の歌姫との成長劇である。

外伝5 もしも千冬が赤騎士だったら（前書き）

はい、皆さん大体は予想していたんじゃないかと思います。

千冬姉がさらに容赦無くなってます。

では、どうぞ

外伝5 もしも千冬が赤騎士だったら

第一回モンド・グロツソ

それはIS史に於いて、織斑千冬の名を世界に知らしめた大会である。

織斑千冬は幼き頃より厳しく遊びが無い性格だった。

両親が蒸発した時など、即座に弟の一夏を知り合いの家に預けて働き始め

仕事が終わったら迎えに行くといった生活をしていた。

原作では白騎士事件だが、この世界に於ける名は赤騎士事件

日本に迫るミサイルを全て長距離狙撃によって迎撃し、その直後に捕縛しようとして来た各国の軍を殲滅し尽くした事で有名だ。

そして、第一回モンド・グロツソに於いて織斑千冬の前に敵は無かった。

彼女を相手にして三分以上保っていられた選手は一人もいなかったのだ。

彼女のIS『魔操砲兵』の前に全てが消し飛ばされたのだ。

元々、彼女は剣道も極めていた達人ではあったが、それ以上に射

撃技術が恐るべきものだった。

彼女が生涯で外した射撃は十発に満たないと言われている。

そして彼女は女性である以前に戦士であり、軍人であった。

IS学園で教師をしているが、そのスパルタ振りにはハートマン軍曹以上と言われている。

もしもシリーズ 第五話 赤騎士の場合

「諸君、私が織斑千冬だ。貴様ら新人をこの一年で使い物になる操縦者に育て上げるのが私の仕事だ。私の言う事は良く聞き、良く理解しろ。出来ない劣等生は私が出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15歳の貴様らを優れた兵士に育て上げる事だ。私の言う事には何であっても“はい”と答える。いいな？」

すると、彼女の言葉を聞いたクラスメイト達は

「キヤ ！！千冬様！本物の千冬様よ！！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです。北九州から」

ミーハーなクラスメイト達の黄色い声が響くが・・・

「黙れ、馬鹿共」

千冬の殺気交じりの一言で教室が一気に黙りこくった。

「貴様らは勘違いしている様だが、ここはアイドルの事務所でも無ければ、楽しい場所などと思うなよ？ここはISの操縦者を育成する軍学校と同じだ。」

その発言に副担任も真耶が慌てる。

「お、織斑先生！？いくらなんでもその発言は不味いかと・・・」

そついう真耶を見て千冬は鼻で笑う

「ふん、下らんな。所詮ISは今はどうあれ、戦争になれば切り札として運用される。戦争が起これば、自分の隣にいる奴と殺し合いをする事もあり得るのだからな・・・」

その言葉にクラスの全員が凍り付く

「何だ？その表情は？まさか貴様らIS条約が有るからと言って戦争に駆り出されずに済むとも思っていたか？そんな甘い考えなど捨てろ。ここに入学し、ISの操縦者となる以上、いつ貴様らは戦争で敵を殺し、殺されるか分からんのだ。だが貴様らは逃げる事もやめる事も許されん。その様な愚か者は私自らが殺してやる。」

余りの発言に何も言えなくなるクラス一同

「さて、静かになった所で・・・織斑、貴様も中々に面白い自己紹介だな・・・」

その台詞に一夏の表情が蒼褪め、ガタガタと小刻みに震えている。

「い、いいいいいや、千冬姉。俺は――がアツ!!?」

ゴツ!!という鈍い音と共に一夏が吹っ飛ぶ。

何人かのクラスメイト達と真耶が悲鳴を上げる。

「織斑先生だ。理解したか？」

「サー!! イエツサー!!」

即座に条件反射の如く答える一夏

どうやら幼い頃から姉に対する恐怖と服従が染みついている様だ。

「さあ、SHRは終わりだ。貴様らには、これからISの基礎知識を半月で覚えて貰う。その後は実習だが、基本動作は体で覚える。いいか、私が何か言ったら全て“はい”と答える。いいな？」

「……………はいッ!!!!!!」

入学早々、彼女達は生きて卒業できるかなあ・・・?と思うのだった。

「織斑、事前に渡した参考書は読んだか？」

「・・・一通りは読みました。ですが一か月では流石に厳しかったです。」

そう言った次の瞬間には、凄まじい衝撃と共に一夏は宙に舞っていた。

「グッ・・・ガハア・・・!？」

更に彼の頭を踵で踏みつける。

「ぐじゅじゅ!!」

千冬は冷酷に告げる。

「言った筈だ。一か月で理解しろとな。」

「ぐぐ・・・申し訳ありません・・・」

「次は容赦せんぞ？」

そう言って彼女は足を離して、元の場所に戻る。

「はぁ・・・はぁ・・・」

何とか立ち上がり席に座り直す一夏

「何を愚図愚図している？愚鈍が。さっさとしろ・・・」

余りの苛烈さにクラス全員が震えながら授業を受けるのだった・
・

そして、クラス対抗戦の最中に襲い来るゴーレム

「ほう・・・我が教え子に手を出すとはな」

「ち、千冬姉・・・」

「織斑先生だ・・・愚弟が。ここは私に任せろ。貴様ら半人前は引っ込んでおけ」

そう言って、少し本気をだす千冬

「Yetzirah」
『ザミエル・ツェンタウツァ
魔操砲兵』

纏うは赤騎士

「Der Freischütz」
『フライシエッツ
ザミエル』
現れるは巨大な列車砲

そして放たれた砲弾が爆音と共にゴーレムをコア以外、跡形も無く消し飛ばす。

「貴方を倒す。織斑千冬！！」

対峙するのは自分のクローンに亡国企業のエージェント達

「くっ、はははははははははは！良いだろっ貴様らの蛮勇を称えて私も本気で相手になってやるっ」

Echter als erschwer keiner Eide;

—— 彼ほど真実に誓いを守った者はなく

treuer als er hielt keiner Verräter;

—— 彼ほど誠実に契約を守った者もなく

lauter als er liebte kein andrer:

—— 彼ほど純粋に人を愛した者はいない

und doch, alle Eide, alle Verräter,

—— だが彼ほど総ての誓いと全ての契約

die treueste Liebe trog keiner wie er

—— 総ての愛を裏切った者もまたいない

So werf ich den Brand in walhalls prangende Burg.

—— 我はこの莊嚴なるヴァルハラを燃やし尽くす者となる

Briah

—— 創造

M u s p e l l z h e i m r L ? v a t e i n n

焦熱世界・激痛の剣

そして展開されるは獄炎の砲身内部の世界

彼女の鬼教官振りに何とか、ついて来ていた一夏。

「し、死ぬ・・・流石、千冬姉・・・遊びなんて存在しねえ」

「そ、そうだな・・・昔から千冬さんは、手を抜くなどと言った事をしなかったからな」

「誰相手でも容赦なく殴りますし・・・」

セシリアも殴られてトラウマになっている。

「そうだね・・・い、嫌だ！もう的には！的にはなりたくないよ
おおお！！！！」

シャルが何かの折檻を思い出したのか発狂じみた事になっている。

「嫌あああつ！！弾幕があ！！爆発があ！！」

鈴も何か酷い事になっている。

「ふ・・・ふふ・・・あのころに比べれば・・・まだ温い・・・」

ラウラは何処か遠い目をしていた。

「貴様ら！いつまで遊んでいる！とつとと来んかあッ！！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「罰として貴様らには私が直々に指導してやるう・・・」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

これはエレオノーレ・フォン・ヴィッテンブルグの新しい人生と伝説の劇場である。

外伝5 もしも千冬が赤騎士だったら（後書き）

流石は少佐、弟相手でも容赦ないですね・

第九話（前書き）

はい、今回は戦闘は無しの日常、中学時代の事や一夏の凄さが分かります。

では、ごんぞ

第九話

「で？女の園って奴はどうなのよ？」

「何？」

一夏は久々に休日を利用して、中学生時代の悪友である五反田弾の家に来ていた。

第九話

「……………昔前のパンダの気分だ。」

「ああ……男が物珍しいのか」

どこか納得したような表情の弾だが、更に聞いてくる。

「でもさ、良い思いしているんだろ？」

「いや、そうでも無い。」

嘘だ！！と読者の心境を代弁しておこう。篝のフルヌード見た癖に、それは無い

「男なら肩身が狭い思いをするぞ・・・」

「でも、男なら一度は憧れるよな。自分以外は全員女子なんてシチュエーション」

「実際はそんなに甘いモノでは無いぞ?」

はぁ・・・と一夏は羨ましそうに言う弾に溜息を吐きながら言う。

「お前の事だ。もしお前が俺の代わりに入学したのなら、ビクビクしながら生活する事になるだろうな・・・」

「なっ、そんな事ね〜よ!」

「中学時代に同級生の女子に告白されたのに、怖気づいて断ったのは誰だ?」

「ぎゃああああっ!!黒歴史を言っなああっ!!」

頭を抱えて悶える悪友を見て一夏はやれやれだな・・・と思った。

普段スケベでお調子者な奴には、告白されると三種類のタイプに分かれる。

その一、いつもの様に軽いノリでOKする奴

その二、いざとなるとビビって怖気づく奴

その三、こっぴつこっぴつ時にはシリアスで真面目になる奴

どつやら弾は二番目だったらしい……

このタイプは自分が好きな奴以外に告白されると、どんなに美形でも勢いやテンパったりで断ってしまう事が多い

弾は例に漏れず、このパターンだった。

「彼女は俺たちの間でも一番人気だった。美形、清楚、器量良し、品行方正、文武両道」

学園のマドンナともいえる彼女を振ったなんて物凄く勿体無い。

実際にその後、級友達にフルボッコにされたのだ。

「すいません！俺が調子に乗ってました！！」

土下座までして頼み込む弾

かなりの黒歴史だったらしい

ちなみにその時の断った理由“俺が好きなのは蘭だ！！”

咄嗟に出たシスコン発言で彼女は泣き出した。

その後に一夏が彼女を慰めるために言った言葉“まだまだ人生は長い”

「鈴や箒に再会できて良かったが……」

「ああ、鈴と前に言ってた最初の幼馴染か……」

「彼女等には感謝している・・・」

そう言う彼の表情は何処と無く柔らかく、優しい目をしていた。

すると、いつの間にかカメラを持っていた弾が一夏の写真を撮っていた。

「何のつもりだ？」

「お前がそんな顔をするのは滅多に無いから・・・写真にして売る。」

「別に構わんが、俺の表情など買う奴などいないぞ？」

はあ・・・分かってないな。この鈍感は・・・と、思った弾

すると、突然ドアが蹴り開かれた。

「お兄、お昼出来たよ。さっさと食べに来なさ・・・」

「久しぶりだな。蘭」

「い、一夏さん!？」

弾の妹、五反田蘭

かなりの美少女で、名門のお嬢様学校に通っている。

しかし、今の恰好は一種の下着にも近いラフな格好だった。

彼女は慌てて陰に隠れると身なりを整えてから、彼の前に出てきた。

「い、いやっ……あの……来てたんですか……?」

「ああ……今日は家に物を回収するついでに寄ってみた。」

「そ、そうですか……」

「蘭、お前なあ……ノック位しろよ。恥知らずな女だと思われ
—っえっ!?!?」

蘭は拳を握りながら弾をギロリと睨む。

「何で言わないのよ!?!?」

「ああ……いや……言ってなかったか?そうか、そりゃ悪かった。
アハ、アハハハハ……」

蘭に乾いた笑いを返す弾を見た一夏は

“彼女の方が強いか……これも女尊男卑……か?”

と、何か間違った方向に考えていた。

蘭はそそくさと部屋を出て行く

「あの……一夏さんも一緒にお昼どうぞ……まだ……でしたよ
ね?」

「ああ、頂こう。ありがとう」

久しぶりに彼らの実家、五反田食堂の食事が食べれる事もあってか滅多に表情を変える事の無い一夏が・・・

「えっ・・・・・・・・・・？」

「マジかよ・・・・・・・・」

優しく微笑んだのだ。

弾も思わず呆けてしまう程の衝撃だった。

それでもカメラのシャッターを切っていたのは奇跡であろう

「はづうづうづうづうづッ！！！！？」

一夏に恋する乙女である蘭には幕引きの一撃になってしまった様だった。

ポオオオオオオオオオオオッ！！！！と凄まじい勢いで蒸気噴射すると猛ダツシユで食堂の方に降りて行った。

「・・・・・・・・何だったんだ？」

「まさか、お前の微笑みをゲットできるとは・・・これ一枚で四桁・いや五桁行くかも・・・」

何が何だかよく分からなかった一夏は、とりあえず食堂に降りて行

った。

すると、着替えてきた蘭が待っていた。その表情は紅く、正に恋する乙女だ。

「あ、あの一夏さん。ゆっくりして行ってくださいね」

「ああ・・・いつ食べてもここの飯は美味しい」

「そ、そうですか？」

その言葉に蘭は嬉しそうにする。

「蘭の嫁に貰える男は幸せ者だな・・・」

「ふえっ!？」

一夏が何気なく言った言葉で真っ赤になる蘭

「それに、随分と綺麗になったな蘭」

「あう・・・ありがとうございます」

プシュシュと顔から蒸気を出しながら答える蘭は可愛らしかった。

「そう言えば、蘭もIS学園を受けるんだったな・・・」

「はい!簡易適性検査ではAでした。」

「そうか・・・」

一夏は目の前の可愛らしい少女がISを纏い戦う様子を想像する。

しかし、その想像はネガティブな方へと向かって行く

“もし戦争が起これば蘭も戦う事になるのだろっな・・・人を殺し、殺されるかもしれない戦場へと・・・”

しかし彼女の人生に口出しする様な権利は無い、ならば自分はせめて彼女が死んでしまわない様にするしか無い

そう考えた一夏は蘭に言った。

「もし、IS学園に合格できたのなら俺がしっかりと面倒を見てやる。」

「えっ!?!い、一夏さんが・・・?」

「ああ、手取り足取り教えてやる。幸い優秀な先輩もいるしな・・・」

「手取り足取り・・・一夏さんが・・・」

何か妄想をして赤くなっている蘭

「弾、蘭の事は任せておけ。俺がずっと面倒を見てやる。」

「ほ、本当ですか!?!?」

正にこの世の春だと言わんばかりにテンションが鰻登りになっている蘭

「ああ・・任せる」(IS的な意味と学園生活的な意味で)

「約束ですよ!？」(人生的な意味、婚約的な意味で)

明らかに何かが致命的に食い違っているが、それに弾が気づいたものの口に出したら人生が終わるので口には出さない

代わりに一夏に言う

「はあ・・お前って学校でもそんなんだろ？」

「ああ・・何故か、篝や鈴に怒られる。」

その言葉を聞いて弾は鈴の事を思う

“ 苦労してんだろうな、鈴の奴も・・・ ”

その後、一夏から聞かされた鈴のプロポーズ自爆話に、弾は男泣きするのだった・・・

さて、ここで一つ、過去の話をしよう

二年位前の織斑一夏と五反田蘭の話を・・・

蘭は今でこそ一夏に想いを寄せているが、出会った最初の頃は違っ

ていた。

彼と初めて会った蘭は、その雰囲気や口数の少ない寡黙な所から苦手意識を持っていた。

そんな彼に恋心を持つようになったのは蘭が不良に絡まれていた時だった。

彼女の近くを偶然通りがかった一夏は、不良共を成敗して蘭を助け出した。

緊張が抜けて泣き出した蘭を胸の中で泣かせた後、腰が抜けて立っていない蘭を背負い家まで送り届けたのだ。

ぶつきらぼうな言葉しか掛ける事が出来なかったが、逆に年上でハードボイルドな雰囲気と合わさって、蘭は安心する事が出来たのだ。彼女を送り届け、何も言わずに去ろうとした所、彼女の祖父である五反田巖に気に入られて、会う度に蘭を嫁にとか言ってくるのである。

一夏は幼い頃から相当有名で、女子に媚びず、堂々としており大人顔負けの正論と腕っぷしで男女間の問題を解決してきた。

今の時代には珍しい一匹の雄として威風堂々と女性の世の中に立っているのだ。

他にも説教や相談に乗って暴走族の更生を行ったり、虐められっ子を救ったり、人命救助を行ったりしていた。

その活躍ぶりと彼に救われたりした恩義などで、一夏を慕う集団が出来てしまったのだ。

といっても、彼らは一夏の舎弟みたいな者達で、彼を筆頭にして世の男たちを纏め上げて、男としての尊厳を守り、女性に負けない強い男を目指したり、虐げられている男を救い上げると言った行動をしている。

この活動は意外にも日本だけで無く、世界の各国にまで及んでおり織斑一夏は実質的に女尊男卑の世界に負けない男達の旗頭でもあるのだ。

彼がI Sを使えた事によって、更にその運動は活発になってきているが・・

どうも女尊男卑の世界によって甘い蜜を啜っていた政治家の一部による鎮圧行動もあつたらしい

名目としては“男性のみの団体を組織する事で女性に対する治安の悪化を防ぐ為”

つまり集団に女性が入っていないのは不平等だろうと言っているのだ。

これには流石の一夏も“こんな時だけ男女平等を謳うか”と呆れた。

それでも彼らは一夏を尊敬し、日々男を磨き、尊厳の回復に努力している。

マキナー夏は原作の一夏とは比べ物にならない程の影響力を持って

いるのだ。

これも彼の徳や性格や生き様のお蔭なのだが・・・

その日、一夏が帰ってからの五反田家は、大騒ぎの盛り上がり様で、舎弟達が彼に会えなかったことに悔んだり“俺たちの蘭ちゃんとお兄貴の婚約記念パーティー”とかが開かれていたりした。

当の本人一夏が知らぬ間に、フラグがとんでもない発展を遂げるのだった・・・

月曜の朝、いつもの様に賑やかな教室に入ると、クラスメイト達がISスーツのデザインについて話し合っていた。

真耶がISスーツについて説明して、クラスメイトに弄られていると千冬がやって来てHRが始まった。

「では、山田先生。ホームルームを・・・」

「は、はいっ！ええつとですね、今日はなんと転入生を紹介しますッ！しかも三名です！」

「『ええええええっ！！？』」

驚きの声が上がった直後、クラスの戸が開いて三人の外国人が入っ

て来た。

その姿を見た途端、静粛になる教室

何故なら、その内の一人は男だったのだから・・・

しかし、一夏が見ているのはそっちでは無く三人目の方だった。

ニヤニヤと小悪魔の様な笑顔で一夏を見る少女

一夏はこれからの生活に多少の不安を抱くのだった・・・

第九話（後書き）

マキナは最早、世界のマキナとなっております。

本人も意図していた訳では無いのに、彼の人望が起こした事なんです。

マキナの何気ない行動が世界の男たちの希望になっています。

そして、ここに来てブラックホースの蘭が周りの土台を盤石なものにしました。

初登場で箒や鈴以上にフラグを発展進化させてしまいました。

周囲公認の婚約に持つていきました。

このままでは蘭が一夏をゲットしちゃうか？

でも、一夏本人に自覚なし

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7189x/>

IS～インフィニットストラトス～黒騎士は織斑一夏

2011年11月2日03時20分発行